

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

2003・3・31

第23号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地
TEL・FAX兼用(0980)82-9985

目 次

| | |
|--------------------|---|
| 竹富町史第十巻資料編「近代2」を発刊 | 1 |
| 竹富町史編集委員会 | 1 |
| 『資料紹介』 | 1 |
| 波照間島の歴史・伝説考（一） | 1 |
| ——仲本信幸遺稿—— | 2 |
| 『記念碑を訪ねて』 4 | 3 |
| 大舛久雄頌徳碑 | 3 |
| 『写真にみるわが町』 22 | 3 |
| 爬龍船競漕 | 3 |
| 『聖地めぐり』 20 | 3 |
| 迎里御嶽 | 2 |
| 『文化財探訪』 17 | 2 |
| ケシムリ御嶽 | 2 |
| 『論稿』 | 2 |
| 竹富町・島々の織物文化 | 1 |
| 収蔵図書紹介 | 1 |
| 業務日誌 | 1 |
| 編集後記 | 1 |

●表紙の写真●

西表島西部にある白浜集落は、島の西部と東部を結ぶ陸路の始終点に位置する。集落は炭鉱の隆盛とともに1916年（大正5）、炭鉱業者が事務所を設けたことで形成されていった。炭鉱で繁栄した集落だが、去る大戦の時には米軍の空襲により焼失、大きな被害を受けた。1960年（昭和35）頃から八重山開発株がパルプ原木の切り出しを行い、活気に満ち溢れた。写真の上方に積み出しを待つ原木が見られる。



竹富町史第十卷資料編「近代2」を発刊

—明治30年代の村落を知る貴重な史料を収録—

竹富町史第十卷資料編のトップを飾る

「近代2」を、このほど発刊しました。

本編は南嶋民俗資料館が所蔵する崎原家文書『必要書』と、宮良殿内文書『必要書類集』を収録した近代資料集です。史料から明治三十年から同四十年にかけての村々の実相や、村びとの暮らしぶりが窺え、村落史の一面を浮き彫りにしています。

西表島南西部に、かつて崎山村、網取村、鹿川村の三力村があり、悠久の歴史を刻んでいました。しかし、崎山村は一九四八年（昭和二三）、網取村は一九七一年（昭和四六）、鹿川村は一九〇九年（明治四二）にそれぞれ廃村になり、今では村内に残る屋敷跡、日常生活で使われていた雑器類の散乱が往時に村があつたことを裏付けます。『必要書』は、一八九七年（明治三〇）に三力村の主村である崎山村の村頭を務めた崎原當貴が書き残した行政文書です。史料には村落の動きや村びとの生活の様子や、村で食したであろう、海や山、畠で収穫した農産品が列挙されていて、村落の食生活を窺い知ることができます。また、貢納布に関する記述もあります。

一方、西表島の南東海上に新

城島（上地、下地）があり、さらに東方海上には竹富島があります。島びとは、人頭税制下では西表島での稻作通耕を営み、柚山で材木を切り出して生活していました。『必要書類集』は、白保与人（明治二十五年～同二九年）、新城村頭（明治三十一年～同三六年）、竹富村頭（明治三七年～同四〇年）の要職にあつた宮良當整が書き留めた行政文書です。史料は五穀の作柄の出来具合、西表島からの木材の確保などを悉さに記していて、村落の一断面を知ることができます。

『必要書』『必要書類集』の共通性は両方とも備忘録の性格を有していることです。そのため、字体は個性が強く、独特な字形が多々見られます。しかし、両資料は人頭税制末期から人頭税廃止直後の各村の実態を少なからず知ることができます。明治三十年代から四十年代を語る一般史料であります。『必要書』の原史料は南嶋民俗資料館に保管されており、一方、『必要書類集』は宮良殿内の宮良家から琉球大学附属図書館に寄贈され、現在同館に保管されています。

竹富町史編集委員会

一編集委員十八名に委嘱状交付一

竹富町史編集委員会委員の任期満了に伴う委嘱状交付式並びに第十八回町史編集委員会が二月一日、町役場大ホールで開かれました。委嘱状は那根町長が出張不在のため、上地義一収入役から十八人の委員一人ひとりに手渡されました。

上地収入役は、委嘱状を交付した後、「先生方の卓識を賜り、創造性に富んだ素晴らしい町史の発刊にお力添えをいただきたい」とあいさつし、各委員への協力を求めました。

第十八回編集委員会は、編集計画の見直し、第十一卷資料編「新聞集成VI」の編集発刊、「島じま編」の編集を議題に活発な審議が行なわれました。

編集計画の見直しについては、平成十五年度発刊の予定だった第十卷資料編「近代I」（竹富島喜宝院蒐集館文書）に替えて、第十一卷資料編「新聞集成VI」を発刊するとしました。「新聞集成VI」はすでに記事の検索を終えており、今後検索記事を精選して収録記事を決定する作業が残っています。

「新聞集成VI」の編集発刊は、決定された後、編集要項について審議が重ねられました。「新聞集成VI」は一九六一年（昭和三十六）から一九六四年（同三十九）までの八重山で発行された新聞（八重山タイムス、八重山毎日新聞、八重山朝日新聞）三紙に掲載された竹富町関係の記事を精選して収録します。記事は古い順に並べる時系列方式で配列します。分量は八五〇頁を見込んでいます。

「島じま編」については、各巻ごとに専門部会を置き、部会を中心には資料の収集、調査を行なうとし、平成十五年度から作業に着手する、としました。専門部会は編集委員に、新たに一人から二人の部会員を加えて編成します。編集委員会では専門部会の編成も行ないました。

編集委員の任期は平成十七年一月三十日まで。編集委員会に先立ち、互選によって委員長に本成善康、副委員長に西里喜行の両委員を再選しました。

竹富町史編集委員会

◎印は副委員長

◎本成 善康（元八重山教育事務所）
○西里 喜行（琉球大学教授）

○加治工真市（県立芸術大学教授）
黒島 精耕（竹富町教育長）

三木 健（琉球新報専務）
玉城功一（元八重山商工高校教諭）

石垣 久雄（元八重山高校校長）
當山 善堂（県漁業信用基金協会）

新本 光孝（琉球大学教授）
阿佐伊孫良（竹富公民館長）

上江洲儀正（南山舎代表）
登野原 武（元竹富町教育長）

里井 洋一（琉球大学助教授）
池城 安伸（元登野城小学校長）

吉川 安一（元県立図書館長）
本田 昭正（元那覇高校教諭）

篠原 武夫（琉球大学教授）
坡座真 武（元白保中学校教諭）

銘里 君夫（町史編集室長）
西里 喜行（元竹富島喜宝院蒐集館文書）

〈資料紹介〉

波照間の歴史・伝説考（一）

—仲本信幸遺稿—

竹富町史編集室では、町史の中核となる「島じま編」の発刊を目指し、各島ごとに専門部会を設置、平成十五年度から部会を発足させるため銳意取り組んでいるが、その基礎資料となる故仲



仲本信幸の家族（年代不明）

本信幸の遺稿が本田昭正編集委員から寄贈された。原稿は、手書き稿を本田委員が読みやすく、ワープロ原稿に編集しなおしたもの

ので、「波照間島の歴史・伝説考」と題名が付されている。

故仲本信幸は一八九七年（明治三十）一月二十五日、波照間生まれ。二七歳の時に竹富村議會議員となり、長きにわたり議員職にあつた。併せて区長を務め、漁協組合長、県水産會議員などを歴任し、農業、水産、畜産、養蚕の振興に尽力した。戦後は、一九五〇年（昭和二十五）九月二六日から一九五六年（同三二）二月一九日までの五年五カ月にわたり、竹富町長の要職にあつた。一九五八年（昭和三三）二月一日、八重山地方府長に就任し、以後一九六一年（同三六）七月三一日までの三年五カ月、琉球政府の施策を推進した。地方府長を退任した後、沖縄生命保険会社八重山支社長を三年間務め、それ以後、公職を離れ、漢方薬と民間療法の研究、波照間の歴史、文化の研究に専念した。幼少の頃から記憶力に優れ、聰明で頭脳明晰だったといわれ、原稿を読むと博識だつたことが分かる。島の民話、伝説を後世の歴史研究に役立て子孫に残そうと情熱に燃えているなか、一九七九年（昭和五四）七月八日、死去した。享年八二歳だった。

竹富町史編集室に寄贈された原稿は、島の歴史、民話、伝説、など、研究領域は多岐にわたる。題名は「神の渡島の伝説」「点在する城跡と群雄割拠」「シシカドンの三子が与人になつた理由」「波照間に伝わる呪術と祈祷の概要」「墓地を南方より北方に移した理由」「甘藷にまつわる伝説」「明和の津波後の移民」「豊年祭の（旗頭）行列の廃止」「波照間の造船と航海について」「火番盛」「波照間島の俚諺」等々で、いずれも「波照間研究」には欠かせない基礎資料となつてゐる。

（竹富町史編集室）

島に初めて人間が移住した年代の推定

波照間に伝わる口碑で、昔、北斗星（七つ星）を見に行つて眺めたと云う高台が島の北側（北部落の西道を北進して坂に下る所にある大泊浜に通する三叉路の右手の台地）にあり、そこまで行かないと北斗星は見ることが出来なかつたと云う。

ところが、この星座は高度に上がり、部落内からも見えるようになつてゐる。この現象は、地軸が北へ傾斜しつつあるためで、この星がその台地から見えた位置と、東部落方面で見える北斗星の高さを測り、その道の専門家に年数を算定して貰うと何年経過したかが推定できるので、波照間島に人間が居住したのはそれ以前ということになる。

神の天下りの伝説による推定

昔、琉球諸島には信仰というものがなく、従つて道徳観念もなく、弱肉強食の悪弊が横行していた。そこで宇宙より三神が天下りして、長男は沖縄本島の弁ヶ嶽に鎮座し、二男は石垣島の於茂登岳に下り、三男は久米島の最高峰に下り、各神が該地の住民に

神道を説いて指導されたのである。

八重山では、於茂登の神が下野して住民の指導に当たられたがこの神の名が於茂登照彦の神で、その妃が照妃で、現在まで信仰されている。

照彦の神に妹が一緒に來られたが、ここより遙か南の洋上に島があつて、そこの住民を守る神が居ないから、お前が行つてやれという指令を受け、下八重山の名称をつけて、石垣島をビギリの島、下八重山を（波照間島）をブナリの島として統轄されることになった。

その時に、五穀の種を分与されたが、美味なキビの種子は分与されなかつたので、しひ種子をカラン（女の下着でスカートの如きもの）に裏に隠して持ち出してこられたので、この穀物のお初だけは神前に供えない恒例となつてゐる。

波照間では神前に供える供物は、米・粟・麦で、このキビと豆類、芋等は供えないことからすると、この天下り当時以後に後者の作物が伝来したことが推察できるのである。

この三神の天下り以前から島内には多くの人間が住んでいたのであるから、琉球史の中でこの三神の天下りの年代がわかれれば、それを基にして波照間の人間居住の年代が推測できよう。

なお、この神話については、別稿で委しく記述してるので、ここではこの程度にする。

油雨の伝説と古墳による年代の推測

波照間島は、太古人間が繁盛しすぎて立錐の余地もない程で、道路は石垣の上を歩き、石垣の幅の広い所には、雨降りの時に大わらじを履いて畠の上を歩き、それに着いた土を置いて、そこにピラ（ニラ）を植えて食べるほど窮屈に追い込まれた。弱肉強食の悪道も平氣で横行する無軌道の人間生活を怒った神が、油雨を降らして住民を全滅させたが、姉弟の二人をバショウチの海の中にあつたビナカン石の下に隠して助けられた。

この姉弟の間から海中の岩の下で生まれたのがボーズ（ミノカサゴ）で、浜の岩の下で産んだラムカデが生まれた。そこで、陸に上がり、岡の上に家を造り、そこで生まれたのが女兒で、これを新生り（アラマリ）のバーと称し、この方を葬つた墓が美底原の大嶺家の畠と波照間家の畠の境にあるが、豊年祭の初めにその墓前に供えるものは總て生物を供える。

このことから察するに、当時はまだ火を使つた調理ができます、あらゆる食物は生食であつたことが窺われる。そこで、考古学者の研究を調べて、日本の歴史の中で生食時代の末期を押さえるとこの油雨（イオウの雨であろう）の年代が推察できるであろう。なお、この墓前に供える生の供物は、礼拝に参列した皆で残らず噛むのである。

私は八重山群島の島々にある古墳や城跡を注目しているが、波照間に遺る古い城跡や古墳のようなものは他には見当らず、十七世紀時代と思われるもので新城島と波照間の内盛（ウチムル）の

城跡は似ており、古墳を見ると石棺時代のものは各島々に見受けられ、特に黒島には多いが、波照間にあるメーブルシの如きものはまつたく見当らない。波照間にはこれも多く、石垣で囲われたり、オバ捨ての跡もあることから、風葬前から人が住んでいたことが窺われる。この古墳については、稿を改めて詳述するので、ここではこの程度で結びたい。

神話について

八重山住民の祖については、南進説と北進説の二説がその道の考古学によつて論説に相違があり、何れが正しいのかその調査資料も違つていて判断しかねるところがあるが、私は諸々の神話や口碑等によつて推察するに、北進説が有力であるよう思つてゐるので、その概要を触れてみたい。

波照間の南西方の岩壁の上に、初めて神が上陸して鎮座されたと云われる所があり、水を差して礼拝する神行事が現在まで続いているが、そこの神主を島本家で代々受け継がれて礼拝の主役を務めている。また、波照間には、南方から七福神が来島されたが島が小さいのでここは永住する所ではないとして、北方の大陸を目指してバショウチの浜から出航されたが、その中の一人の神は自分はこの島に残つて島を守ると云つてバショウチの浜の石（当時は海中にあつたであろう）に上つて、一行を見送つたとの神話が伝えられ、島ではこのただ一人残つた神をバショウチの神と称えて、島のほかの神々は人間が神になつたので皆「ウヤン」と称

えて祈願するとの伝えである。

この神が神々を見送ったという石には、島の神行事のある度に水を差して礼拝するのであるが、波照間では神の鎮座する場所にはなんの供物も供えず、水だけ差していることを、日本の古代神祭典に水だけ差していた故事と対照して考察すると、波照間が古代文化の発祥地で、先に述べた二つの神話によつて北進を証明する証拠になる。

また、暖流（黒潮）に流されて遭難者が漂着して上陸したことも首肯があるのである。十六世紀の終わり頃より西欧やマニラの漂流船のほとんどが波照間島の南西海岸に漂着していることもこの海流に関係しているのである。

神の渡島の伝説

波照間島の大泊海岸に東方のフナタ口から神の船が入港して、浜の岸壁の下の湧水（ケーラ）の下方の石に船のとも繩を結んで上陸したとの伝説があり、大泊海岸の張水（岸壁の下の湧水）を頼つて海岸に村落を形成して居住したのが島に人間が定住した最初で、そこから発展して東西に水を求めて住居が移つて行つたことが推察されるのである。それを証明しているのが、下田原貝塚である。

それは、現在の下田原は昔は入江の湿地帯で、東方の高台に屋敷跡や城壁の遺構があり、洞穴内に風葬の跡が示されている。於茂登岳から下られた女神もこの高台に鎮座されたという神話

からも首肯される。

フタナ口は神の口だと未だに称えていることからすると、ここに入居された神は北東方面から来られたかの疑問があるが、私は島の南西方に到着したが、上陸地点を求めて東方面へ回つたが、岸壁ばかりで船を入れる海口がなかつたので、北東へ廻るとこのフタナ口と大泊の入江を見当てて入港し、そこを拠点にして永住の地と決めたであろうと想像している。それでこここの地名を大泊と命名したであろうと推察される。

この来島が北の方からだとすると、西表島からは浜がよく見えるので、フタナ口よりイナマアレー口、バショウチ口が入港の条件がよいので、その好条件を利用して上陸し、美底原の湧水を利用してそこに村落を建てたであろうから、南進説には賛成しかねるのである。

住民の移動分散について

波照間は、神話伝説や貝塚の存在等から推察して、この下田原を村落発祥の地として東西へ延びたであろうことは、古屋敷や城跡、古墳のあり方からして否定出来ないことであるが、記録がないので、移住の年代や廃村の歴史を詳らかにすることが出来ないので、その遺跡や墳墓をもとに考察するほかはない。

美底原（内盛）方面の住民は、津波の被害を避けるために屋久やシムチ方面に移動したようにあるが、東方面へ移動したのは十八世紀の終わりまで居住したようにある。これを証明しているの

が、ユングトウに詠まれている保多盛家の男とマシュク村の女との男女関係で示され、また下志村跡の下志ケー（井戸）の東側に番所（オーシヤ）の敷地跡が残っている。この遺跡は、波照間が琉球王府の治世下に入つたことを示しているので、この年代を知るには、八重山が琉球王府の統治下に入つた年代を調べてそれから推測することであろう。

また、下志村の住人が明和の津波当時まで居残つていたことを示しているのが、名石部落が大浜へ移住させられて廃村となつた跡に、下志村から富底、桃盛、金盛等が移転するまでこの村民が残つていたのである。マシュク村や下志村跡に残つている井戸の造り方や、古い墳墓を調べて年代の推測をなすべきであろう。

点在する城跡と群雄割拠

波照間には各所に城跡が残つているので、その構造によつて年代を推測することができると思う。

島内に残されている城跡で、古い型のものは門が造られず、石垣は幅が広く高く積み上げられていて、俗にブルブチまたはブランと呼ばれていて、島内に六ヶ所くらいある。

ベーミシユク・ナボルチ・下志は今も型が崩されずにあるが、昨今は道路工事のために崩されつつあるのは遺憾で、なんらかの保護が必要である。

農耕のために型が全壊された所が三ヶ所もあり、当時はそれぞれ分かれて首長がいて、農耕地や漁場の縄張りを争つていたこと

が窺われる。

その年代を推測するには、付近に点在する古墳（メーブルシ）の構造によるほかはないと思われるが、その構造は石棺時代前のものであることに相違ない。

また、石垣の一部だけ残つている所や、東西、南北だけ残つているものもある。その主なるものにヨーブチ・タカフク等があるがこれは外寇に備えたようで、島の要所に点在している。石垣を高く積み上げてある遺跡が残つている所もあるが、これはアザマグまたはアジと称して、部落の外側にそれがある。

部落内には墳墓があるが、その在り方からして当時は自分の屋敷内または近隣に埋葬したようで、当時この城に居たのは、統治権をもつたわゆる按司であつたであろう。波照間の呼び方に、アザマグ・マヤー・アカマラ等の口碑が伝わつてゐるので、沖縄本島の按司時代との関連があつたと思われるので、その研究も必要である。島の大石御嶽の祝詞に、殿内（トウンチ）アザマグ等の呼称があり、研究の対象に挙げられよう。

沖縄本島各所にある門が造られている城跡によく似ているのが一ヶ所（内盛アザマグ）あり、沖縄本島に残る各所の城跡の年代と関連づけて考察する必要がある。

なお、このウチムル・アザマグには世定めの水ガメがあつて、その水量の多少によつて、当年の作物の豊凶、世替わり等を占つていた。

平家の残党の漂着

昔、大和の国人が漂着したが、島の東北に漂着したものは賊人であるとして、大泊浜の東の凹地（ナーバタクムル）に集めて焼き殺したので、その盡の遺恨を怖れて、その地は現在まで農耕を忌み、その付近には癪患者の隔離所を造つて、その患者の農耕に当っていたが、現在は荒廃している。

一方、島の西北方の浜に着いた人達は、救世主として篤く待遇され、彼ら乗つてきた船を皆で陸揚げして、好機の来るまで待機させたところを大和船浦と称えたが、その場所の名称は現在でも大和船浦と云う。

彼等漂着者は、充分静養させて食糧を与え、南の方へ向けて出港させたという伝説が遺されているが、私はこの漂着者は壇の浦から敗走した平家の残党であると想像しており、そうだとするとその時代は十二世紀末ということになる。

波照間出身の豪傑の概要

八重山歴史に登場する偉人のなかに、波照間出身者が多いことは島民の誇りである。例えば、長田大主、赤蜂、成屋鍛冶工、美世須久獅子嘉殿、その後輩に屋久与人、新本与人、振石盛与人、古見首里大屋子、祖平大舟（ウニ）、ターリウニ、屋久アカマラゲートウホーラ等が挙げられるが、西表からは慶来慶田城唯一人竹富島からは西塘ひとり出ているのから推察すると、波照間民族

の偉大さを証明している。これはどうしてだろうか。後輩の我々がその理由を究明して、これらの先輩に続く努力をすることが私共後輩の責務であると思う。

私は、島津氏の琉球征服まで続いた南蛮貿易の盛んな時代に、彼の大國の優れた文化の吸収と、琉球王府のとつた政治犯の流刑地ということで、流刑者の優れた知能伝授のお陰によるものと思っている。

従つて、波照間島の住民はこの優れた血統を受け継いでおり、この卓越した伝統を受け継いで努力すれば、これらの先輩に続く者が輩出するであろうとの希望を抱いている。それで、これら偉人の活動の概要を後世のために述べてみたい。

長田大主（ナーダウフシユ）

長田大主は、宮古の仲宗根豊見親と波照間の女、前野ナビとの間に生まれた男児で、八歳の時に豊見親が部下二人を派遣して宮古に呼び寄せ、首里王府へ留学させて、八重山の首長に任命され赴任させたとの伝説がある。この幼児を宮古の使者に引き渡して乗船させる前に母親のナビは幼児を伴つて真泊御嶽に航海安全と子供の武運と安泰を祈願して、子供に遺言する訓話が伝えられている。その要旨を示すと、「お前のこの生母が自分の子であると思ふ心は、今日限り忘れるので、お前も私を生みの親と思う心を今日限り忘れて、生涯自分の生母や生誕地を他言するな」と厳しく言い渡した。そして、イナマ港の西側の岸壁の上をダチゴ（石垣ではタデフ）の下を通してから宮古からの使者に引き渡したの

である。

昔から役人を迎えるときには、この岩の根元にダチゴをX字型に組んで、この下をくぐつて上陸したり、離陸して真泊の神前に礼拝することが常道であったのである。

使者はこの幼児を二人の間に置いて、大事に守つて出港したので、母親が手拭いを振つて別れたが、大主は生涯自分の生い立ちについて一切口外せず、母親の遺言を守り通し、親子の便りも断つたので、ここで旅立ちの見送りの時に手拭いやハンカチ等で手振りをすると、永遠の別れになると云い伝えられて、今日まで守られていたのである。

大主の屋敷の西北方に長田山と云う拝所があつて、代々前野家に生を受けた長女がこの拝所の神司になつて拝々を続けており、その拝所の北方凹地を長田割りまたは長田底と呼んでいるが、大主がここで生まれたので長田と命名したのか、長田大主の名にちなんで地名にしたのかは不明であるが、私は地名が先で、そこで生まれたから長田の姓を名乗つたであろうと思つてゐる。

長田大主（長栄姓一門の祖）については、沖縄及び八重山の文献が示しているので、それを参考にすればよいのであるが、この文献の中に年代の食違がある。それを気をつけることである。

オヤケ赤蜂

八重山の歴史で名高いオヤケアカハチは波照間で生まれ育ち、やがて石垣島へ渡り、大浜村の首長となつて、首里王府に反抗し

て戦つた英雄で、琉球史上の大事件として歴史書に記録される人物である。

赤蜂については、その生い立ちについて、島の南の浜や高那崎の岩の上に捨てられた赤子を拾つてきて育てたとか、記録者億測による違いがあつてまちまちである。私は彼の生まれたという屋敷跡が敵として現島尻家の南方の高台に遺つており、しかもこの屋敷が昔の風水見法の貴人や財宝に恵まれる条件に叶つた場所でありながら、この屋敷に住家を構えて子を産めば、赤蜂の如き逆賊が生まれると忌み嫌い、今日に至るまで人が住まない事実から推して、赤蜂がこの屋敷で生まれたことに相違なく、捨て子の説は否定しなければならない。

波照間では赤蜂を、ボーマ（大浜）赤蜂と称し、波照間赤蜂とは言わず、また、彼の両親や兄弟・親族のことが不明であることは時の権力を恐れて口を閉ざしていたためであろうと思う。赤蜂のことを逆賊と蔑視したり、英傑であつたと称賛する人もあるが、私は波照間に伝わる口碑を記述し、後学の参考にしてもらえばと思う。

赤蜂の蜂起前までは、納稅は大和ヘーラ（木製の糸を紡いで入れる箱で三斤入りぐらい）の一杯の米であつた。また神田遊び（カンドアスピ）と云つて、神と人が一ヶ所に寄り集まつて七日七夜歎を尽くして舞い遊ぶ行事（沖縄本島ではイリキアマリの祭と云う）があり、その遊びに掛けた礼装が現在も旧野底家に遺つている。

この僅かであつた上納を増やし、神田遊びの行事を禁止されたことに憤慨して、これを是正させるために立ち上がつたのが赤蜂であると伝えている。

彼は波照間島を出て石垣島に渡り、洞穴に居住し、猪を獲つて農民に振る舞い、農民の人気を得て大浜村に移り、そこで旗揚げしたというのが島に遺る伝説である。赤蜂の年代は、史書（球陽八重山島由来記、家譜など）に記録されており、それを参考にすればよい。

成屋鍛冶工（ナリヤカジク）

成屋鍛冶工は刀劍作りの名人であつたが、この技術の修得は、

はるばる九州へ渡り、波平築前の守に長年（伝説では七年）師事して、その刀剣を作りの技術を修得した。そして、全精魂を打ち込んで仕上げた刀を示して、師匠より免許を受けて帰島した。家に帰つて妹に「これまでの苦労の甲斐あつて、この名刀を作つて土産に持つて来たのであるが、この名刀は他人には絶対見せるな」と師匠から固く注意されて來ているので、見せるわけにはいかない」と話した。すると、妹は「見せるなというものは見たくなるのが人情があるので、是非見せてくれ」という熱情あふれる嘆願を断ることができずに、刀を鞘から出して妹に見せたところ、妹はその刀の威力に押されて氣絶して死んでしまつたという。

そこで、成屋鍛冶工は、「この小島は、自分の生きる島ではないので、南方の国土の広い所へ進出すべきである」と考えて、南方行きの船に便乗した。そして、広い陸地が見えたので、そこへ

上陸することにしたが、上陸する時に船員たちに「明朝、私の体が島のフサシ（小林のこと）の上に飛び上がるが見えたたら、上陸して來い。もし見えなければ、退去するように」と言い渡して上陸して行つた。

翌日夜明けに見たら、川面が血に染まつて流れで来るので、船員たちは怖くなつて港外に退去して見たら、本人が抜刀してフサシの上に飛び上るのが見えたが、恐怖のあまり上陸する勇気もなく、本人をその島に残して退去したとの伝説である。

成屋鍛冶工の住家は、振石盛御嶽の北東にある加屋本の畠がその跡であり、鍛冶屋は現在の振石盛御嶽の神座であつて、長田大主や赤蜂の使用した刀剣は、成屋鍛冶工の作であつたとの伝えがある。

また、波照間に帰島する前に、大浜村に一時寄留して農器具作りを伝授したとの説もある。この人がどうして日本本土へ渡つかか、疑問になるのであるが、私は倭寇の一昧と親しくなり、彼等の船で渡つたであろうと推測している。その理由は、川平の長山の仲間満慶の父が倭寇の一昧であつたとのことで、仲間満慶は赤蜂時代の裏石垣の豪族であつたことと併せて考へるからである。

美世須久獅子嘉殿（ミウスクシシカドン）

この人は島の西方一帯屋久村を中心に統治する豪族で、腕力は赤蜂より優れていたという。赤蜂はその勢力を恐れていたが、石垣島に渡つて勢力がつくと、勢力分野を拡げる必要から仲間満慶を討ち取つた。平久保の加那按司は、西表の祖納堂（慶田城）に

討たれたので、恐れるのはこのただ獅子嘉殿ただ一人であった。そこで赤蜂は、彼を討ち滅ぼすため、部下を派遣してうまく欺いて舟に乗せて石垣へ渡航する途中で殺害する計画であつたが、彼の強力を恐れて手が出せなかつた。たまたま舟が古見の浦を通つた時に、獅子嘉殿が小便のために舟べりに立つたところを海に押し落とし、浮き上がるところを竿で押し沈めて窒息させて殺し赤蜂の意図は叶えられたのである。

この訃報を受けた獅子嘉殿の三児は、親の遺体を探しに古見へ渡り、三日間探し求めたが、見つけだすことができず、疲労困憊して古見の前良川の下流の離れ島に来て休息していると、風のない風なのに前方に生えているヒルギの木が、台風に遭つたように揺れ動くので、兄弟は「親の遺体を探し求めて今日で三日になるが、見当らないで悲しんでいる。もし御靈がここに泊まっているのでしたら、もう一度木を動かして見せて下さい」と合掌したら二度目の動搖があつたので、その所へ兄弟が石を一個ずつ置いて合掌し、祭祀をして帰島したのである。この跡地に神社を建立して、古見の住民が祭典の行事をしたのがミチラ御嶽（三離御嶽）の由来であると伝えているが、この御嶽は離れ島があるので満潮の時参拝するのに支障が多かつたので、現在の場所すなわち前良川の下流に向かつて右側の地に移したと口碑は伝えている。

なくなり、残るは長田大主の征討であるが、赤蜂は長田大主より勝っていたので、大主は負けて追われ、逃げる途中崎枝に立ち寄り、そこの老婆に助けを求めた。老婆は承諾して、酒を蒸留する釜の下を深く掘り下げて、その穴に大主を隠し、その上を蓋してその上に薪を置いて火を付け、鍋を置いて水を入れたりして追つ手を欺こうとした。

追つて來た赤蜂は、これを見抜いたが、老婆に向かつて、「大主をこの下に隠してあるが、大主は水の下、金の下、火の下、土の下に落ちているので、出てきても島の主にはなれないから許しておこう」と言つて引き揚げて行つた。

大主はそこから出て、芭蕉の茎で筏を造り、西表島のユナラに逃れたと口碑は伝えている。大主は西表島の山中に隠れて舟を造り、首里と連絡をとるよう懸命に努力していることを知つた獅子嘉殿の遺児三名は、長田大主を助けるために古見に渡つて大主と協力して舟を造り、沖縄へ向けて出帆途中で、沖縄からの赤蜂征討の大軍と出会つた。そこで、八重山の情報を提供し、赤蜂討伐に手柄を立てたので、この努力が首里王府軍に認められて、長男は屋久与人に、次男は新本与人に、三男は振石盛与人に取り上げられたということで、このことは記録（琉球国由来記など）にも残つてゐる。

長男の屋久与人は、父獅子嘉殿の跡を継いで現在の保多盛家の祖であり、次男の新本与人は、ただ一人筑（筑佐事）を仰せ賜り首里の印を押された辞令が保多盛家に現在も保存されている。筑の奉職は、現在の裁判官・警察官の職務に相当するもので、石垣

獅子嘉殿の子三名が与人になつた理由

赤蜂は、獅子嘉殿を亡き者にしたので、群島内では恐れる者が

島に老後まで居住していた。現在の新本当枝氏の家は、この人が創始したものである。老後、生まれ島に帰つて、現在の新本家に居住して夫婦とも暮らしていた。墓は同家の南東方に造り、夫婦はそこに葬られたが、そこから時たま銀の簪が出土した。

振石盛与人については、アバテ御嶽を創立した事以外に伝わっていないが、島の中央以東の統治の任にあつたであろうと想像できる。

波照間の三拝所の由来

真徳利御嶽は、屋久与人が創立した御嶽で、神名は同名であると記録（琉球国由来記など）は示している。白原御嶽は、新本与人が公務を終えて帰島して建てた拝所であると記録は示しており神名は同名であると示されている。振石盛御嶽（アバテ御嶽）は振石盛与人が建てたと古記録にある。

この拝所の設置について、首里王府の許可を受けたことを証明しているのが、真徳利御嶽である。最初に設置したのが安里家の前の高台であったが、ここが不許可になつたので、次にカラチヤマに移したが、ここも不許可になり、さらにスクナバリに移したが許可されず、現在御嶽のある所へ移したらようやく許可され、喜んで帰る途中に詠んだのが「波照間口説」であるとの伝説がある。

真徳利御嶽の許可が下りるまでの過程を慮り、次男、三男はその位置をとく勘案して定めたので、文句なく許可されたのである

が、その位置については洞穴が多く人畜の往来に危険があり、岩石だけで農耕に不適な場所に許可を与えたのは、当時の琉球王府が農耕に重点を置いた政策をとつていたからである。

アバテワーの名称は、兄二人によつて御嶽が建てられたので、三男は振石盛与人は、自分も負けじと慌てて建てた御嶽なのでアバテワーの名称になつたとの説が残つている。

〔真徳利御嶽の検査合格のときに詠まれた波照間口説〕関連

女傑の輩出

波照間は、太古より人間が住み着いていたことは、下田原貝塚の出土品で察せられるが、波照間島のすべての環境が、人間の繁栄により条件を具備しており、人口の増加に拍車がかかり、油雨の如き伝説が出る程で、人口激増の結果、人々の生活権を守る争奪戦が激しくなつたことである。このことは、陸上のパ力、海のパ力を定めたことがそれを証明している。

住民を統轄する群雄が各要所に城を築いて割拠していたことは要所にある城跡がそれを示している。ところが、天災地変の災禍を受けて人口の衰退した後は、生き残った人々が所々に生活の拠点を求めて分住し、外敵の襲来を防いで、資源を守つて生活していたことが築いた城壁の跡を見て推測できるのである。例えば、マシユク村の海岸に積まれてあるタカフク（高城）や内盛（ウチムリ）の按司の城跡、ヨー武士の城跡や長積みの石垣等がそれを物語ついている。

この時代は、外部から入る者も多く、従つて外部から生活に必要なものも受け容れられる反面、生活必需品を盗まれることもあり、外来者の入港は厳重に見張つていたと思われる。この時代のものとして、群島内では、新城島の上地にある城跡をはじめ、その他（鳩間島など）にある。

波照間ではこの頃、女尊男卑の思想が芽生えたと思われ、女傑が続出している。伝説のなかに登場する女傑を拾い出すと、キバーパア、ベーピサマバア、下志バア、ビタブーパア、川平ブーパア、シムチバア、山田ブーパア等の名が挙げられる。これらの女傑たちはそれぞれ持ち味を生かして、何か住民に益する行為をして名を挙げた人達で、その伝説を紹介する。

キバーパア

この人が住んでいた屋敷は、真徳利御嶽の南西方の海岸近くにあり、現在は神屋敷と言われて、後世の人々はここにあるものを取ると神罰が当たるとして避けている。水は遠くビタケーから大きな容器に入れて運んだと云われるが、その井戸の下り口が南の方から開けられていることから、ベミシユクブラもここから水を得ていたと思われる。この人は、その荒地を開墾して農耕していたと伝えられる。このバーが強力で、彼の地で勢力を張つていたことは察せられるが、この人についての伝説は残っていない。

ペーピサマバア

このパーの住んでいた屋敷は、島の東北方の遙かに遠い所で、

石の多い所である。この人が波照間に初めて苧麻（ブー）を移入して作り始めたと伝えられ、島では苧麻（ブー）のパン（祈禱詞）を「ペーピサマバヌ ツクリオールタル ブーシチナ シムチャナーケーシシスチナー」と称えるのである。

この人の糞を入れた石倉跡も残っているが、何故にキバーパアも、このペーピサマバアも水のない石の多い所に居を構えたのかを考えさせられるのである。

このバーに女の子があつたが、母がシムシケーに行つて水を汲んで来いと云うと潮水を汲んで来て、母親を困らせたとのことである。

シムシーカア

シムシーカアの屋敷はシムシケーの北方にあつて、現在は拝所になつていて、この人は徳望の高い人であつたが、ある年に大旱魃が続いて島内の水が枯れて、人畜が死線をさまよつてゐる時にこの人の飼つていたアカマラ牛が、前足と角で穴を掘るのを不思議に思い、その牛をそこへ連れて行くと同じ動作を繰り返すので靈感高いバーはその下に水があることを感じて、掘つてみたら見事に湧水を当てた。これがシムシケーであるという。

この井戸の水で島の人と家畜が救われたので、爾來、神井戸と尊崇され、バーも神人と崇拜された。この井戸の西側にフリー石を置いて拝んでいるのは、アカマラ牛に感謝する意味で、その牛の肝臓として拝んでいるとのことである。

現在まで雨乞いのときには、この井戸の水を汲んで、各拝所へ

差し上げる習わしになつてゐるのである。

山田ブーバア

山田ブーバアは、大和人と協力して彼等の勢力を借りて、ビタブーバアと対立しながら勢力を伸ばしていたとのことであるが、この人の勢力はピラチウガリより東であつたようである。この人に関する伝説の主なるものを述べてみよう。

山田ブーバアは、琉球王府から波照間へ流刑された稻福里之子の妻となつて、里之子と協力して首里への遥拝所を要所に設置して拝々したが、現在、稻福ヤマと称されて子孫の拝所になつてゐる。また、イナマのビツチユル山に立つてゐるビツチユルは、彼女がヨーピナの烟の中から掘り出して立てて拝んだとの伝説である。

しかし、このビツチユル石は、島内にある石質ではなく、男根を象つた陽石であるとのことから、南方から入つてきたものと考えられる。

ビタブーバアは薩摩の役人に反対したため土地を取り上げられたが、山田ブーバアは協力したために、イローピナの台地の土地を多く与えられたとの言い伝えもある。山田ブーバアの勢力の主力は、下田原方面であつて、イナマの方に延びていたであろうことは、真泊御嶽の火の神、イナサヒー（番小屋）、ビツチユルの神司は山田の長女に受け継がれていることから首肯されるのである。山田ブーバアの知識及び勢力は、稻福里之子が知恵を受けたものであろうと推測している。

ビタブーバアについては、稿を別にして詳しく述べる。以上の女傑のほかにも、シコーダバアがおり、屋敷跡や井戸、墓等が遺つているが、伝説がないのである。

ピタブーバア物語

波照間島の有名な女傑、ピタブーバアは、島の神祭典を定めたばかりでなく、薩摩の検地役人に反対して土地を取り上げられた話をなどを遺しているが、記録がないので年代は確定できない。しかし、波照間にシシカドンの三名の子によつて拝所（御嶽）の出来たことや、田原（タパリ）にある同人親子を葬つてある墳墓の構造や、遺骨と遺骨甕、さらに墓内に煙草容器のないこと、副葬の日用生活容器の状態から推察して、今から三〇〇年以前の人であると思われる。

この人は神媒の靈感の強い女性であつたようで、この偉人についての伝承は多いのであるが、その主なものを紹介する。

真徳利御嶽の検査合格のときに

詠まれた「波照間口説」

真徳利御嶽は、シシカドンの長男屋久与人が創始した御嶽であるが、その場所の設定について、現在の安里家の前の高台に始まり、カラチヤマ、スクナバリヤマの三ヶ所を次々と計画して申請したが、いずれも検査に合格せずに実現しなかつたが、現在の真徳利御嶽のある位置に指定して創立の許可申請したところ、琉球

王府の派遣した検査官の検査を受けて合格した喜びを帰途の道順に従つてブーバアが詠んだのが波照間口説との伝承がある。

しかし、作詞作曲に協力し、舞踊の振り付け等よりみて、無学のブーバアの作詞ではなく、検査役人が作詞作曲に協力し、舞踊の振り付けは、沖縄から来た役人が主役であつたことが首肯される。

御嶽のある所を見ると、洞穴が多く農耕作には不適な危険の最も多い所である。波照間島は昔から人口の増大が大で、油雨の伝説の如く人口の密集地であつたことは、この拝所の森林の中にはすき間なく畑として耕作された跡が残つてることを立証している。

ところで、この拝所設定時代は、薩摩に琉球が制圧されて、苛酷な貢納を強いられていたので、農産獎励に拍車がかけられており、農耕の適地に拝所が許可されるはずではなく、結局、農耕に不適な場所が許可の対象となつたのは、白郎御嶽、振石盛御嶽をみても同様である。

高那割（タカナバリ）の閉塞にブーバアの協力

太古、波照間島は、高那割の割れ目がピラチのウガリの下まで続き、台風の大波がその割れ目より吹き上げて、農作物を枯死させて、島民の生活を困窮させているのを、ブーバアは耐えられず、同志を募つて塞いだので、その後は海波の吹き上げが止まり島民の苦難を救つたとの伝説がある。この割れのあつたことを示しているのは、高那割よりケバルヤマの割れ目を経て、西南方ピラチ

のウガリの下まで洞の吸い込み（アブ）が続いていることである。なお、豪雨の時、ユナバリ凹地に大池ができる、ウガリの下まで水が満ちてくると、ウガリの下の道際の所々で水泡が吹き出るのを見ると、その下方は空洞であり、その空洞に水が充満すると空洞内にあつた空気が押し出されて、水泡が出てくるものと推測される。

田原ドウの田地を没収された話

ビタの前の田は、大半がビタの所有であつたが、薩摩の耕地整理の役人の行動に対して、ブーバアが反対してその命令に従わなかつた為に、所有の田はビタブーマーシ一枚を残して没収され、他に分かち与えられたという。そのため、ブーバアの財産が減り衰えたというが、現在もこのビタブーマーシは本比田家の所有でこの田から採れる米が拝みの供物に供された。

人間の生血を海上で洗うと海波が荒れ出す のを鎮めるための親子の実験の話

川平ブーバアは、ビタブーバアの娘で、川平家に嫁入りしたのであるが、この人もビタブーバアに劣らない知謀に勝れた偉人で母親の宣託に対して常に反対の立場をとり、自ら実験を試みてその結果の良否を決め、後世に伝える規範を制定したとの伝説がある。

この実験の一端を紹介すると、母親が人間の生血を海上に流すと波が荒れるから慎むようにと諭したので、自分の月経で汚れた

メツチャー（パンツ）を持つて行き、海で洗つたところ、直ちに

海が荒れ出した。そこで母親のブーパアは、フナミツキの拝所を回つて風波の鎮まるように祈願したところ、風波が鎮まつたのでこの要所に石（火成岩）を置いて目印にして、風波の静止を祈願した。

以後、神司は台風で風波が荒れると、遙拝所の神前で祈祷を始めて、次に石を置いてある要所に行き、風波の静止を祈祷し、最終はイナマの真泊御嶽へ行つて、祈祷する習わしが継続された。現在は祈祷の思想の薄れとともに、要所に置いてあつた石も道路拡張で形跡もなく消滅しているが、この遺跡は、島の歴史を語る重要な文化財なので、昔あつた付近にその石を残しておく必要がある。

ビタブーパアのフナミツキ祈祷の概要

ブーパアは、台風襲来によつて風波が荒れ出すと、荒れ狂う風波を鎮めるために、このフナミツキの要所を順々に回つて祈祷して鎮めたといわれ、その順序は次の通りである。

ブーパアは、自宅前にある航海安全の神前から祈祷を始め、次に後にある拝所に祈願し、三番目には大嶺岳の南下の三叉道路角にある所で祈祷し、四番目にフルマル道と富嘉部落より毛原道や真徳利御嶽の神が遙拝所に通られる神道の三叉路の境の所で祈祷した。五番目には、西武堂村の表道路、フルマル道と保多盛家の裏道の三叉路の脇で祈祷中に、フルマルの突出した岩の穴に打ち寄せる波の音が弱まり、海鳴りの音がサーサーと聞こえると風波

が鎮まりかけていることを悟つた。

七番目に船道を下つて富嘉部落よりイナマに通うアダチ道が船道に突き当たる二又道路、現在の前津家の畠の南西方の高所に拝々として、イナマの真泊御嶽に拝々するまで風波は鎮まつたとの伝説である。

私は、この道順を追つて祈祷する時間と、低気圧（台風）の風心の通過の時間を考慮すると、時間的にこの現象がやや一致するので、昔科学的知識のない時代では、この祈祷が尊重されて実行されたのだと思う。何故に道の交差点や道の峠（高所）において祈祷したのかは謎であるが、その理由を究めることも面白いと思う。

ビタブーパアに関する伝説は、このほかにも多いが、このへんで筆を止める。

七神の渡島の伝説

太古、波照間の南西方より七の神が上陸されて、島のシムチの洞穴内に居住され、各々の職分に従つてその技術を広められたのである。鉄（金）の神が鉄を生まれさせた所を下金（ウルカネー）と今でも称えている。この神は、シサンチヌイン（インは洞穴のこと）で鍛冶を始められたとのことであるが、この洞穴は百年前までは大人が立つて歩けたと云うが、私どもの幼い頃はヤドカリを拾うために、三五くらい奥まで這つて入れたのが、今はミミズの糞が溜まつて塞がれている。

寄せる波の音が弱まり、海鳴りの音がサーサーと聞こえると風波

の聲が溜まつて塞がれている。

また、その付近に炭粉があり、金糞（製鉄の残滓）があるのはそれを物語つている。ところが、この神々はこの島はあまりに小さないので、各々の職分を広めることができないとして、大陸を求めて北方へ向かつて出発された。出航の港はバショウチであつたが、その時一人の神は、最初に発見したこの島を見捨てるには忍びないと云つて、島に残つて守護に当たる旨告げて、海中に突出した岩の上で六名の神々を見送つたという。以後、この島には、

この神一人が神と称えられ、祈りの時は「バショウチの神」と唱えるのはこの意味であり、その岩に水を差して礼拝を続いているのである。他の拝所で「ウヤン」と称えて礼拝するのは、この後の拝所には人が神として祀られているためであると云い伝えられている。

なお、シサアール（新原）の北方には黄金盛（クガニムリ）、南方には銀盛（ナンチャムリ）があつて、金銀が蓄えられていたが、この神の引き揚げとともに石に化けた言い伝えられる。北の方のは井戸の北方の石、南の方は田の中にある大石である。七神が最初に上陸した南西方の岩壁の岩には今なお水を差して礼拝している。

波照間が神高い島であるのは、神々が最初に上陸して足跡を残した島であり、しかも、一人の神が居残られたからであると云われている所以である。

私はこの伝説を信じることはできないが、油雨の伝説と抱き合わせて、地殻の変動（地震）による沈没であつたと考えられる。何故かといふと、琉球列島より八重山群島へ、与那国、台湾、フィリピンのルソン島の北方からカミゲン北へ続く列島、最北辺の北島、台湾東海の赤礁島の海底の続きを見たり、フィリピン諸島から南へ続いてマレーシアに近づく列島のあり方によつて、太古はこの列島がアジア大陸の陸続きであつたのが、幾度かの陥没、隆起によつて現在のような列島が形成されたことが推測され、バイティローマは沈没したのではないかと思われる。

この構想で思い当るのは、波照間のおよそ三十哩南に曾根（ソ

バイティローマ伝説

古人の語るところによると、昔、波照間島の南に低い長い島があつて、草を焼く煙が見える程の近距離で、この島をバイティローマと呼んでいたという。そして、小豆の収穫の季節（小豆には二種類あつて、旧暦五月と旧暦九月の収穫最盛期に分かれ、波照間では八月チャードを栽培していた）になると、この島の住民が夜陰に乘じて小豆を盗みにやつて来て、その被害が少なくなかつた。そこで、この盜人を来島させない方法はないかと島の有力者が集まつて協議し、海を荒れさせて来れないようにすることとなつた。この海を荒れさせるのに最も効果があるとされたのは、布織機（ハタ）を海に浮かべることであつた。さつそく実行したところ、大波が立つて島が沈み、煙も見えなくなり、小豆の盜人も来なくなつたという伝説がある。

私はこの伝説を信じることはできないが、油雨の伝説と抱き合わせて、地殻の変動（地震）による沈没であつたと考えられる。何故かといふと、琉球列島より八重山群島へ、与那国、台湾、フィリピンのルソン島の北方からカミゲン北へ続く列島、最北辺の北島、台湾東海の赤礁島の海底の続きを見たり、フィリピン諸島から南へ続いてマレーシアに近づく列島のあり方によつて、太古はこの列島がアジア大陸の陸続きであつたのが、幾度かの陥没、隆起によつて現在のような列島が形成されたことが推測され、バイティローマは沈没したのではないかと思われる。

ネ)があつて、波照間島よりやや大きい鰐の漁礁があるのを、大正の終わり頃、私ども第二大福丸によつて発見され、私が大福ゾネと命名したが、そこがバイバティローマ島の沈没した跡かも知れない。

なお、油雨の後に生まれたアラマリヌバーの墓は現在残つてゐるが、その年代やバイバティローマ沈没の年代は今後科学的に解明されることを期待する。

なお、赤礁島の南の小島や、台湾本島の南西にある小琉球に行つた経験のある当群島の人達が、牛の呼び方や日常生活の様式等が波照間とまったく似ているから、ヤグアカマラの一団が逃亡した島であるか、またはバイバティローマの人々が移住した所ではないか、と確かなように吹聴する人もあるが、私はこの説には疑問をもつてゐる。それは、ヤグアカマラが苛酷な貢納から逃れるために部落民を伴つて離島したのは今から三百數十年前で、琉球が薩摩に制圧されて苛酷な納税を強いられていた時代であり、その時代以前に波照間の住人は南蛮貿易に従事しており、彼の地の文化や生活様式が移入されていたことが考えられ、波照間以南の島々も同じ文化の刺激を受けて、同じ文化の型が維持されてきたであろうとの視点から、この疑いが出るのである。

この生活様式を立証するもので、南ベトナム方面の生活を取材したテレビ放送を見ると、南ベトナム国境に近い地域の住民の家屋のあり方や、生活様式が波照間と寸分も違わぬことである。特に、家の間取りや副家(トーラ)および高倉等の類似点を見るところが強い。副家(トーラ)の構え、周囲の石垣、ヒンブン

(ナーフク)が同じで、特に五穀を貯える高倉(フファ)がまったく同じであることにおいて、前に述べたような思惑が出るのである。波照間の高倉は、太平洋戦争の後まであつたが、経済や生活様式の変化によつて消え去つてしまつたが、この高倉の構造は波照間の島民が昔から勤勉で貯蓄心に富んでいることを立証している。

将来、この南ベトナム国境に存続する住民の生活様式と、戦前の波照間島の生活様式を比較対象した研究をしてみることも面白いと思う。

ユノンムルの口碑

ヤグ村跡の西北端に、石を積み上げた盛が今も残つてゐるが、これがユノンムルである。この遺跡についての口碑を後世の学徒の史跡研究の一端に役立てばと思ひ、記述する。

この遺跡が現在もそのままあり、ヤグ村の住人の屋敷跡やアカマラの住宅の跡や、その当時の住人の造つた墓もそのまま残つてゐる。この石盛(イシムル)は、与那国へ通う時の帰途の目標にせひと必要であり、築いたものであろう。

伝説によると、ヤグ村の住人が与那国の人所へ通つて、帰りの目当ての為に築いたといわれる。この伝説を考察すると、波照間島民が南蛮貿易に使用した船は、八反帆船と三反帆船であり、与那国へ通つた船は三反帆船でカヌーに似た船であつたことが窺える。このカヌー型船の速力を示した伝説に「一ヤク千尋、二ヤ

ク万尋」というのがある。現在のカヌーの如く十二人で漕ぐと時速十二哩以上走るので、この三反帆船に十二人くらい乗つて漕いだとすると、与那国まで五時間くらいで到着したのであろうことが想像される。そこで午後五時頃波照間を出発すると、同十時には与那国到着して、ゆつくりと恋人と語り明かし、船員たちも何か必要なものを物々交換して翌日午後五時頃与那国を出発して夜の十時には波照間に到着できるのである。

航海の目標であるが、与那国島の宇良部岳は二三〇米もあるので仲の神島を過ぎると与那国島が見えるので見当は早くつくのであるが、波照間島は標高六〇米しかない低い島で、西から東に向う場合は島が細長くて見当がつけにくい。そこで火の光に頼る必要があり、この石盛を築く必要があつたと考えられる。

保多盛家の北西方の石垣の上にも与那国ムルといつて幅の広い石垣が積まれてあり、与那国との交易が盛んに行なわれたことを物語つている。この年代は記録がないため、確認は難しいのであるが、シシカドンの長男のヤク与人が自家の周囲の石垣を首里城に似せて造つたとの伝説があり、首里城の石垣は竹富の西塘が指揮して積んだといわれる。保多盛家の石垣は西塘以後積んだことになる。この石垣の上に与那国向けの祈願所が作られているのと見ると、与那国との交易は赤蜂討伐以前より始められていたであろうことが窺われる。

また、一説には沖縄本島のマーラン船が建造されて、八重山から首里王府へ納める年貢を積み輸送する船は、波照間の八反帆船が当たつていたとのこと。宮古の仲宗根豊見親が与那国鬼虎征

伐の船團長が、波照間のウヤマスアガダナに会つたことを考える」と、波照間ではそれ以前から南蛮貿易が盛んで、航海術に勝れており、近隣との交易も盛んに行なつていたと思われる。

南蛮貿易が盛んであつたことを立証するものとして、ヤグ村跡の古屋敷の跡地や古石垣の中から、曲玉（マガダマ）が続々と出土するのがそれを示している。それで南蛮方面から輸入した曲玉や香木を、与那国方面との三角貿易を通じて、与那国産の米やその他の生活必需品と交換のため、該地との往復が盛んになつたことが推測される。

三拝所の神司と花米田の由来

拝所の神司は、創立者の姉妹かその子孫の長女が神司になり、礼拝の総責任者として神行事を司つた。そのため、花米が要るのでは、田を指定して、そこから産出する米を花米に充てたり、お香その他礼拝に必要な品を買う費用にした。このように指定された田が俗にいう花米田で、代々の神司によつて管理されていた。

この神司になる人は、引きを言われる拝所創始者の直系や最初の神司の直系の人によつて受け継がれ、原の子（バラヌファー）は創立当初の部落民でその拝所に拝々をした者の子孫である。山人衆（ヤマニンズ）とは、ビキやバラヌファーではないが、その拝所の区域内に居住して神行事に参加し、費用を分担する者の名稱である。

この神司に管内住民の七歳以上七三歳までの者は、年一合五勺

の米か栗を年三回、十月中旬、二月中日、五月に五勺ずつ神司に納めて、島の代表が住民を代表して納付、拝々をするのでこの五勺の穀物を五勺米（グソーミ）と云う。

この行事に参加する島の代表は男であるが、この行事は参加する神行事中もつとも厳格なもので、この行事中に不謹慎な行為をなす者は、神罰を受けて生涯不幸が続くと警告されていたが、神司は女であるので、神司に対する不都合ないようにとの訓戒であったであろう。

部落内にある拝所

五ヶ部落にある拝所は遙拝所で、本拝所まで種々の供物を持ち運んで礼拝する面倒をなくすために、部落内に遙拝所を建てて、祭事を行なう前に本拝所に神司が参拝して、神を遙拝所の前に設けてある神座に御伴して、ここに諸供物を供えて礼拝するのである。この神座を島ではブーと呼び、石垣方面ではイビと称している。この神座は、本拝所の真正面に向って祈願できるようになつてゐるので、波照間では真正面（マソーミ）とも云うのである。

先述の三拝所（真徳利御嶽、白郎原御嶽、阿幸侯御嶽）だけが首里王府の許可を受けて拝所と認められているので、三名の本神司に花米田の授与もあるが、長石村の大石御嶽と東の北村の美底御嶽とは脇遙拝所であるが、本拝所へ向けてブーが設けられ、本拝所へ向つて真正面に座つて祈願できるようになつてゐるが、美底遙拝所に古見の美世須久に向つて真正面に神座があるのは、古

見浦美世須久の神（獅子嘉殿）を遙拝するブーである。

海上での縁起について

バイバティローマ伝説で、布織機が海上で縁起の悪いことを示したが、与那国島から西表島に来る物盗りをなくす為に、その間の海に布織機を持って行つて浮かべたら、海が荒れて物盗りが来なくなつたとの言い伝えもある。また、鍋を海上に浮かべると直ちに風波が荒れて豪風雨が襲来するとして、昔の人はこれを強く慎み、大正末期まで波照間では布織機は組み立てたまま船積みするのを避けて、わざわざ分解して積み荷し、鍋を海上に浮かべて洗うことを厳禁していた。

人間の生血を海水で洗うと海が荒れだすとして、波照間では厳禁されていた。このことについては、ビタブーバアと川平ブーバアの親子の物語に出るのである。ビタブーバアが、この波の荒れを鎮めるために祈願した跡が現在も残つてゐる。

ニンニク（ビル）を海上に持ち出すと海が荒れるといつて、波照間では節祭後、翌年の豊年祭が済むまでは絶対に乗せないようになっていたが、明治の終わり頃から近代文明が漸次入つてくるなかで薄らいでいつた。また、海上で大声を出して歌うと、風が吹き荒れるといつて、昔人は船上で高声を出さなかつた。これは、大正の終わり頃、自然に消滅したが、これらの思想の理由を科学的に解明してみるのも面白いと思う。

屋久阿嘉真良（ヤグアカマラ）の逃避

屋久村の首長の阿嘉真良は、苛酷な年貢に耐えなくなり、八帆船に年貢を積んで、順風を待つて船を盗んで村人全員を乗せて南方に逃避しているのであるが、その逃避の理由に挙げられる伝説の一端に美布の割り当てが加わり、飛ぶ苧麻の纖維を持つて紡いでやつと間に合っているのに、更にこれを加担されても耐えられないから、南方には無税の島があるので、そこへ逃避を決行する外はないと決意して右の手に出たことになっている。

年代及び村人の数は記録されておるので、それによつて記入すればよいのであるが、私はその村人の数に疑問がある。何故なら私の調べた記録には七十八名となつてゐたが、最近、八重山の古事記を調べてゐる方の発表では、四十余人となつてゐることである。何れが正しいかは不明であるが、遺つた屋敷跡を見ると、十四～五戸の跡があるので、四十余人は少ないようである。その記録は、当時島の役人の報告によつて記録されているでしょくから役人の報告が確実になされたか否か疑問がある。

この古屋敷跡や石垣の中から数種の曲玉が出るので、これから推して、この村は古くからあつて南蛮貿易が盛んに行なわれた実績が示されているので、阿嘉真良はこの貿易の実情を知悉しての実行であつたであろうことが想像できる。

また、阿嘉真良の屋敷の中央に火の神が遺つていて、神行事にその石に水を差して祈願することら察すると、この村人は古から神行事に参加していたことが窺われ、阿嘉真良の屋敷の東南下に

ウリガーが現在あつて、雨乞いのフサマラーがそこから出て雨乞いの祈願に出て、このフサマラーの面や服装も最後の儀式が終わると、この井戸端に収めるのを見ても、この村人は島の行事の主催者であつたことを想起される。

ナビカキマス（現黒島家の田圃）と云う名称は一行の一人の女が鍋を忘れてきたので、それを取つてくるまで出帆を待つてくれと申し出たところ、それを待つてゐるうちに番人に見つかつたら決行が不可能になるばかりでなく、酷い目に遭うから、出帆して船を南へ回航するから、お前は鍋を持って南の海岸で待つように指令して船は出帆したのである。そのため、その女は急いで帰宅して、鍋を持つて現ナビカキマスの所まで行くと、夜が明けて船は海岸に寄らずにそのまま南方へ進行してゐたので、その女はそこで、鍋を搔いて泣いたので、以後そこの地名をナビカケーと呼んだことである。このことからすると、この決行は極秘中に行なわれている。

（続く）

大舛久雄頌徳碑

新城島出身の大舛久雄氏の功績を讃えて建立された頌徳碑である。碑は大原集落内に建ち、すぐ近くに大原神社、県道白浜—南風見線をはさんで南側に八重山支庁長の要職にあり、一九四五年（昭和二〇）五月三日、支庁長官舎の防空壕内で米軍機の空襲により死亡した。大原集落は戦前の一九四一年（昭和一六）、県営自作農

大舛氏は戦時中に八重山支庁長の要職にあり、一九四五年（昭和二〇）五月三日、支庁長官舎の防空壕内で米軍機の空襲により死亡した。大原集落は戦前の一九四一年（昭和一六）、県営自作農



竹富町離島振興総合センターの北側に建つ頌徳碑（大原）

頌徳碑建立の動きは一九五七年（昭和三二）にあり、同年五月三日、大舛氏の命日に頌徳碑建設委員会を結成。七月七日に頌徳碑建設事業建設趣意書が作成され、広く郡民に募金を呼び掛けている。趣意書は以下のように綴られている。

故大舛久雄氏を慕い奉るとき、その生前の御功績は枚挙いとまなく取り分けて、この大原開発事業に対しての先見の明と終始一貫敢闘なされたご熱誠の功は偉大にして高く顕彰されるべきであり、草分けの親として優れたる御頌徳は永久に神として祭り上げられるべきと存じます。翻つて大原建設の歩みも星霜を重ねるにつれて開拓が繰り広げられる苦難の境を乗り越えて今や郷土建設への夢を胎み尚も各方面に飛躍的実績が裏付けられつつあることは慶福に堪えないところであります。この建設の一歩一歩こそは大舛氏に捧げられる報恩の一鈞であると考えられます。さて、虎は死して皮を止め、人は死して名を残すで大舛久雄氏の御靈は現神として末永く我々の将来を見守つて下さるであります。これを思う時、今のままでは済まされない切なるものを感じます。この切なる我々の心はほどなく、ここに報恩の記念事業問題がたまたま地元大原に燃え上り御頌事業を遂行する目的からなどと記す。

頌徳碑は九月一日に着工し、十二月八に完成。同日落成式が催された。碑は現在、松林の中にひそりと建つ。

創設南風見開墾事業の導入に伴い、新城島民が入植して村づくりの第一歩が始まつたが、大舛氏は開墾事業に心血を注ぎ、新城島民の大原への移住を積極的に推進した。

頌徳碑建立の動きは一九五七年（昭和三二）にあり、同年五月三日、大舛氏の命日に頌徳碑建設委員会を結成。七月七日に頌徳碑建設事業建設趣意書が作成され、広く郡民に募金を呼び掛けている。趣意書は以下のように綴られている。

故大舛久雄氏を慕い奉るとき、その生前の御功績は枚挙いとまなく取り分けて、この大原開発事業に対しての先見の明と終始一貫敢闘なされたご熱誠の功は偉大にして高く顕彰されるべきであり、草分けの親として優れたる御頌徳は永久に神として祭り上げられるべきと存じます。翻つて大原建設の歩みも星霜を重ねるにつれて開拓が繰り広げられる苦難の境を乗り越えて今や郷土建設への夢を胎み尚も各方面に飛躍的実績が裏付けられつつあることは慶福に堪えないところであります。この建設の一歩一歩こそは大舛氏に捧げられる報恩の一鈞であると考えられます。さて、虎は死して皮を止め、人は死して名を残すで大舛久雄氏の御靈は現神として末永く我々の将来を見守つて下さるであります。これを思う時、今のままでは済まされない切なるものを感ずるわけであります。この切なる我々の心はほどなく、ここに報恩の記念事業問題がたまたま地元大原に燃え上り御頌事業を遂行する目的からなどと記す。

爬龍船競漕

八重山の豊年祭は、旧暦六月に村を挙げ、島を挙げての大きな祭りである。祭りは、二日間あるいは三日間にわたり行われるのがほとんど。御嶽では神司が五穀豊穣の祈りを捧げるとともに、奉納芸能が繰り広げられる。村落は期間中、祭り一色に塗り潰される。

豊年祭については鳩間島も同様である。島では旧暦五月に「スクマーチ」と呼ばれる祭儀があり、稻穂を神前に献上し、敬虔な祈願を行う。その時、豊年祭で演じられる笛が吹かれるという。島の人たちは、笛を音を聞くことで、祭りの時節に入つた、と意識するようだ。祭りは約一カ月後にクライマックスを迎える。

島の祭りは初日、「ユードウシ」と呼ばれ、神司、ティジリビバギツカサ、村の有志たちが友利御嶽に一晩こもり、祈願する。二日目は「トーピン」で「サンシキ（棧敷）」と称する聖なる場で数々の芸能が演じられる。最終日の三日目は、「シナビキヌビン」で綱引きが東西に分かれて勇壮に展開される。

豊年祭のユニーク性は、「トーピン」に行われる爬龍船競漕にある。競漕は旗頭をサンシキから浜辺に移動するとともに、二隻の舟を海に下ろし、漕ぎ手が乗り込む。その時、「世乞いジラバ」が歌われ、それが終わると舟漕きが始まる。東村、西村の旗がなびき、懸命に櫂を漕ぎ、ゴールを目指す競漕の雰囲気が伝わる。



東村、西村の対抗で行われる豊年祭の爬龍船競漕（昭和25年）

迎
里
御
嶽



新装になった島の南西にある御嶽

黒島にある御嶽のひとつ。ンギストウワンと称される。島の村落は統廃合を繰り返しており、ンギストウワンは、ンギストウ（迎里）村にあった。御嶽は村が

創設されて以来、村びとの信仰の要としての役割を担い、聖地として崇められてきた。御嶽は鳥居、拝殿、イビという八重山の御嶽の基本型式をなしているが、嶽域は一部を除いて区切りがない。長い間、簡素な拝殿が建てられ、内部に神棚があり、そこに香炉が置かれていた。神棚の上部には「迎里嶽」「頼永」「徳仰」の篇額が掲げられていた。イビは拝殿の後方に、ひつそりと設けられている。周囲にはブロックの壁が一部残っていたが、一九九一年二月、拝殿が改築され、神司をはじめ関係者が集まり、落成式が挙行された。拝殿改築に伴い、篇額も移され、神棚も新装となつた。

御嶽は『琉球国由来記』巻二十一に記載された公儀御嶽の一つで、島の八嶽の一つに数えられる。由来は不明だが、豊穣と航海守護の御嶽と伝わる。古老によると、琉球王府時代には御嶽で役人の赴任を祝う歓迎式が行われたという。役人が來島すると「火の神」を尊拜し、その後、御嶽で役人を歓待したといわれる。ただ、役人を歓待した場所が聖地として

トウニムトウは大工家。神司の出自も同家の系統から出る。ティジリ（カマンガ）は鳩間家から。『琉球国由来記』卷二十一には「迎里御嶽 神名 阿宇慶山 御イベ名 サタイ主大神 右嶽由来不相知」と記す。『琉球国由来記』（一七三五年）が編集された当時、島は二力村からなり、島の南西部を黒島村、北東部を保里村として区切り、迎里御嶽は黒島村に属していた。島の村落史をさらに遡ると、『宮古八重山両島絵図帳』（一六四七年）には、宮大里村、中大里村、迎里村、はいひた村、崎原村、ひかち村ほふり村、ふかい村、上離村、下離村の十力村が記されている。

豊年祭の時、舟漕ぎ（バーレー）に先立つて、漕ぎ手一同が御嶽に詣でて神司から神の芝を貰い受ける。

御嶽は仲本集落の南西約二百㍍にあり海が近い。嶽域にはテリハボク、ガジュマル、ハスノハギリの大木が繁茂する。

御嶽になるのか。村びとが御嶽という神高い場所に選定したのは、あるいは別の意味があるかもしれない。

たた、役人を歓待した場所が聖地として

マル、ハスノハギリの大木が繁茂する。

（文化財探訪）17

ケシムリ御嶽



波照間島にある御嶽のひとつ。前部落と南部落の中間にあり、道路をはさんで北側に大底御嶽（ブスクワー）がある。御嶽には鳥居、拝殿がなく、馬蹄状に石垣が巡らされる。入り口の正面には香炉が置かれている。周囲は鬱蒼と亜熱帯常緑樹に覆われ、薄い。御嶽の原型を彷彿させる聖地である。

島には『琉球国由来記』巻二十一に掲載されている通称ビテヌワーと呼ばれる、真徳利御嶽、白郎原御嶽、阿幸俣御嶽と、ピテスワードに対応する、ウツヌワーと呼称される阿底、大石、大底、新本、美底の五御嶽、それにケシムリ御嶽と同様、村の御嶽ではない小規模の御嶽がある。

ケシムリ御嶽は、大底御嶽より古いといわれ、小さいながらも祭祀集団をもち、神司も代々、継承されている。神司は西田原家か砂川家の男系の女子が相続しており、大底御嶽のすべての儀礼に参加し、年三回の神司の寄合（パンユレー）にも対等に加わっているという。トウニムトウは親盛家である。

島に残る古老人の伝承によると、御嶽は長田大主の鍛冶屋のあつた場所とも称され、氏子は王府時代に沖縄本島から流刑された者たちの子孫だといわれる。ただ、『琉球国由来記』にある阿幸俣御嶽に「カイシモル与人が拝み始めた」とあることから、阿幸俣御嶽とケシムリ御嶽は密接なつながりを有する、とみられる。



前部落と南部落の間にある御嶽

竹富町・島々の織物文化

□島じま小史

竹富町は、日本列島の最南端、八重山群島に属する一六の島々（有人島九、無人島七）を抱える“多島町”である。気象は四季を通じて暖かく、平均気温二三・四度、湿度八二%、年平均降水量二、四〇六ミリの温暖多雨亜熱帯性気候で、島に住む人々にとって快適である。島々は東シナ海と太平洋に囲まれ、島間は珊瑚礁が広がる。夏場の晴天時には台湾を眺望することもできる。このような自然環境のなかで、島人は往古から個性に満ちた歴史と文化を育んできた。

竹富島、小浜島、黒島、鳩間島、西表島、新城島（上地島、下地島）、波照間島はそれぞれ先史時代から古琉球、近世、近代、現代に至るまで独自の歴史を刻んできた（由布島は戦後、集落を創建）。各島には遺跡が数多く点在しており、そこから八重山式土器、石斧、陶磁器の碗、甕などが出土、検出されている。これは島じまに古い時代から人びとが生活していた証左であり、粗末ながらも衣食住を整えて暮らしていたことを裏づける。このなかで西表島の仲間川沿いにある仲間第二貝塚、波照間島の北側にある下田原貝塚は、八重山では今から三五〇〇年前の最も古い遺跡で知られる。

島じまは、小さいながらも村落が誕生し、その中から英傑が登

場して、村を統轄するようになると、農作物の生産が飛躍的に増大した。竹富島には玻座間、仲筋、幸本、久間原、波レ若の六村があり各首長の下に祭祀を守っていた。今では各村跡に御嶽が建つ。小浜島にはフルロウ山、ウティスク山などの遺跡、黒島にはミントウハネマ、ナンザト、サキバルなどの小村跡、鳩間島には中森、西表島には西部に祖納の上村、東部に仲間第一貝塚などの遺跡、さらに数多くの遺跡群、新城島にはウイスク村、ナーメ村、アラスク村などの村落跡、波照間島にはマシュク村、ミシュク村の村跡、下田原城跡などがあり、遺跡から往時の人々の食・住を多少ながら想起することができる。しかし、衣については遺物が残つておらず、窺知するには難しい。

島じまは、先史から緩やかな時間が流れ、人々は小集落を形成して暮らしてきたが、一五世紀に入ると、西表島、波照間、加えて石垣島に村落共同体の首長が出現。お互いに勢力を競う、いわゆる群雄割拠の時代を迎えた。祖納の大竹祖納堂儀佐、慶来慶田城用緒、波照間島の明字底獅子嘉殿が、その人物であり、彼らは生業の改革を図り、人々の信望を集めて村を統轄していた。琉球王府は島々を併合し、完全に王府の支配下に置くことを目論んでいたが、首長間の離散集合があるなかで、一五〇〇年（弘治一三）には石垣島の大浜で勢力を誇るオヤケアカハチが王府に反旗を翻し敗北すると、八重山は王府の版図に組み込まれ、以後、琉球王国の一地域になつた。

島々は、一七世紀から一九世紀までの近世期は、琉球王府の強固な統治が続き、島民の暮らしぶりを、様々な古文書から垣間見

島じまは、小さいながらも村落が誕生し、その中から英傑が登

固な統治が続き、島民の暮らしを、様々に古文書から垣間見

ることができる。この時代は人頭税が施行され、寄百姓（移住政策）による新村建てあり、村落の興廃が著しい。

人頭税は一六三七年（崇禎一〇）に始められ、一六五九年（順治一六）に定額人頭税になつたといわれ、一九〇二年（明治三五）まで続いた。八重山は米と貢納布を負担したが、これが島びとの暮らしを圧迫した。税制は各村の村位を上村、中村、下村、下々村と定めるとともに、村民を一五歳から五〇歳までを上男（二一歳～四〇歳）、中男（四一歳～四五歳）、下男（四六歳～五〇歳）、下々男（五歳～二〇歳）とし、村位と年齢の組み合せによって税高が決まつた。貢納布は上納布の白上布、白中上布、白下上布、御用布の白細上布、紺細上布、赤縞上布があり、決まつた負担量を織るには苦労の連続だつた。全精力を捧げて織り上げた時には髪の毛が抜けるほど心身ともに疲れきり、病人のようにやつれていった、といわれる。

寄百姓（移住政策）は、人頭税制下で強制的に行われた。島に人口が集中すると、一人当たりの土地が狭くなり、一定の貢租が上納できなくなるため、人々を別の島に移住させた。竹富、黒島、小浜、鳩間、波照間などの小島から広大な可耕地を有する西表島への寄百姓があつた。これは一七世紀後期から一八世紀後期まで続いた。移住政策は減少した村の人口を補充するほか、新たに村を創建し、人頭税を徴収する狙いもあつた。八重山史上、未曾有の自然災害となり、村々に多大な被害を与えた明和の大津波（一七七一年）後に移住策がとられたが、人口は停滞し村落は疲弊、衰退していった。

□島びとの生活と織物

西表島のほか、小島に住む人々は先史時代から一五世紀後期にかけて、どのような暮らしを営んでいたであろうか。食については狩猟採集から農作物の栽培へ、住については掘つ立て小屋から床付き家屋へ、とそれぞれ暮らし環境は整備されていった。衣に関しては往古の人々は何を着衣していたのか、窺い知ることは難しい。そのなかで、八重山に関する数ある古文書の中で『李朝実

明治政府の「琉球処分」によって沖縄県が設置され、琉球王府が解体すると、しばらくは王府時代のかつての施策を踏襲する「旧もに「地租条例及國稅徵收法」が施行され、百姓を苦しめた人頭税が廃止となつた。一九〇八年（明治四一）四月には「島嶼町村制」により三間切の各村をひとつにした八重山村が誕生した。しかし、一九一四年（大正三）分村となり、竹富村が成立した。村役場は竹富島に置かれた。だが、役場が竹富島にあるのは他の島との交通の利便性に支障があるとして、一九三八年（昭和一三）、石垣島に移転した。以後、役場は石垣島に置かれ、行政が行なわれている。一九四八年（昭和二三）七月二日、町制が施行され、竹富町が誕生した。その後、一九七二年（同四七）、本土復帰を挟んで過疎化の波が押し寄せ、島からの人口流出が激しかつた。しかし、近年、島間でばらつきがあるものの、人口減少に歯止めがかかり、人口三六〇〇人台を保持している。

録」成宗一〇年の条に記された、いわゆる「朝鮮濟州島民漂流記」は往時の人々の衣食住を知る貴重な文献資料である。

同記は、一四七七年（成化二三）に与那国島に漂着した朝鮮濟州島民が西表島の祖納、波照間、新城、黒島、多良間、伊良部、宮古を経由し、沖縄本島まで転送される時に、島じまで見聞したこと書き留めたもので、一五世紀後期の各島の実相を窺知できる資料的価値の高い史料である。その中の与那国島の項に衣食住に関する記述がある。

麻・木綿なき亦蚕を養わず。ただ苧を織りて布となし、衣を作りて直領（朝鮮の武官の衣の領がまつすぐである）の如くなるも領及襲積なく、袖短くして闊し。染には藍青を用う。裙には白布の三幅を用い、臂に統めて繋ぐ。婦人の服も亦同じ。ただ内に裳を着して中裙なし。裳も亦青に染める〔「朝鮮李朝実錄所載の琉球諸島関係資料」李熙永（編訳）〕

この記述から察すると、衣服は麻、木綿、絹がないため苧麻を織つて仕立てており、染料は藍を用いている。内容は与那国島のことだが、敷衍すると八重山の島々もほぼ同様であろう。素材の苧麻は栽培されたものではなく山野に自生する山苧であつた。八重山での織物の起源は不明だが、「朝鮮濟州島民漂流記」から推測して最初に織られたのは苧布だつたようだ。その後、人頭税の施行により苧麻の栽培が奨励され、纖維を紡ぎ織られた白の上布、中布、下布、さらに紺縞、赤縞の上布、中布、下布等は貢納布として王府へ納められた。上布は現在、一三樹を標準としているが貢納布の上布は一七樹から二〇樹の細上布で一反を織り上げるの

に多大な日数を要した。

島じまの女性は、上布のほかに芭蕉布も日常着として織り上げた。芭蕉布は上布より古く四季を通じて着用した。上質の芭蕉布は、王府の王女、神女たちの白朝衣、黒朝衣として使用された。木綿布は一六四二年（崇禎十五）に木綿が栽培された後、織られたよう貢納布の対象だつた。その他、絹布もあつたが、王府の官僚らは本土や中国から同布を求めて着用していたといわれる。

上布は気品が高く、清楚なイメージが漂うが、婦女子の呻吟の中で生まれた。織り上げるには苦労が尽きなかつた。織る工程、織り上げた喜びを歌った民謡に「芋引き」「布晒し節」等があり今でも「結願祭」等、祭りの場で奉納芸能として踊られる。

人頭税時代の島々は、貢納布が租税として義務づけられていたこともあり、織りの文化が花開いたが、王府が解体し、沖縄県が設置され、しばらくして人頭税が廃止されると織物は流通システムに組み込まれ、商品化された。白細上布、木綿、赤縞布等の需要の増加に鑑み一九〇七年（明治四十）、八重山郡織物組合が発足。織物の製造及び販路開拓、営業利益の向上を目指した。織機は地機に替わり短機が創案されると、販路が大いに開け、織物從事者が増大し織物事業が芽生えた。

沖縄県は明治三十一年から養蚕の奨励を図り、蚕業の技術伝授に乗り出した。各地で講習会が開かれた。併せて細上布の原料となる苧麻の自給を図るために、良質の種苗を配布して栽培が推進された。芭蕉布の原料となる糸芭蕉の植栽も同様だつた。郡内では織物品評会、桑園桑苗品評会が盛んに催され、島々には養蚕実行

貢納布の上布は一七枚から二〇枚の細上布で一反を織り上げる。

織物品評会 桑園桑苗品評会が盛んに催され 島々には養蚕実行

組合が組織された。蚕業への情熱は各島とも高かつた。しかし、去る大戦により島々は大きな打撃を受けた。織物も例外ではなかつた。

竹富町の島々は戦後復興が進むなかで、戦前からの織物も再興が図られた。一九四八年（昭和二三）から織物品評会が盛んに開かれ、苧麻、糸芭蕉の栽培も戦前に引き続き行われた。島々には苧麻生産組合も結成され、県の補助金交付を受けて栽培増殖が図られた。養蚕も戦前と同様に行われ、桑園が設置され繭の生産とともに、絹布を織る人も出てきた。県の肩入れ等があり、島の人々は懸命に養蚕などに取り組んできた。一九五四年（昭和二九）には八重山織物工業組合の織物精練漂白所の落成を記念して「八重山上布奨励数節」（作詞・上勢頭亨）が披露され、さらなる上布の生産を呼びかけた。上布の原料となる苧麻は当時、竹富町の大換金作物だつた。

西表島、波照間島、黒島、鳩間島、新城島では戦前から苧麻を栽培し、糸芭蕉を植えて上布、芭蕉布を織り、祝着や普段着と着用、さらに養蚕にも力を注いだ。各家庭では桑畠を設け、繭を生産し、時には糸取りをして絹布を織り上げた。しかし、各家々では家内工業的に織物を織つてきたが、昭和三〇年代に入り製糖業の導入、畜産、その他、換金作物の栽培に重点が置かれ、織物は衰退していった。ただ機織、糸車など、過去に織りに使用した道具類が僅かな家庭に残つてゐることが、かつて島々に織りがあつたことを伝える。

竹富島、小浜島は他の島々に比べ織りの文化が開花し、脈々と



種子取祭で着用される伝統的な織物（竹富島）

現在まで息づいている。人頭税時代から戦前まで続いた織りを戦後も重要視し、継承しようとする人たちが両島には数多くおり、織りの技術を修得していた。特に婦人の中には産業構造が変化するなかで、織機に向かい、伝統的な織物の再興に取り組む人がおり、これを島ぐるみで支えた。島では盛んに織物品評会が開かれ織りを奨励した。婦人らは山野に自生する草木、それに植栽した染料植物を染め材料に用いて、上布、芭蕉布等を織り、日常生活のなかで縫製して着用した。

両島では一年間を通じて多彩な祭りが行われるが、特に竹富島の種子取祭、小浜島の結願祭の時には島の住民のほかに、島を離れた郷友らも大勢参加し、互いに島を思う心の繋がりを確かめ合う。村びとは祭りでは島で織れた上布、芭蕉布、ミニサードの祭り衣裳に身を固めて奉納芸能を演じ、神に村の繁榮、五穀豊穣、無病息災の祈りを捧げる。往古から脈打つ織りの伝統が祭りの場で發揮される。

□ 織りの世界

竹富島

石垣島の南西約六キロの海上に浮かぶ小島で「民芸の島」「観光の島」として全国に名を馳せる。集落は坡度間（東屋敷、西屋敷）、仲筋に分かれ、島の中央部に位置する。赤瓦屋根の民家が建ち並び、白砂の道が縦横に走り、沖縄の原風景を彷彿させる。国の重要伝統的建造物群保存地区（町並み保存）に選定され、往古のた

たずまいが今に残る。私設の民俗資料館の喜宝院蒐集館、それに民芸館があり、伝統文化としての織物が継承されている。また、初代頭職の西塘を輩出し、八重山全域を統治する政府、蔵元が創設された由緒ある島である。

島は民謡の宝庫でもあり、「仲筋ぬヌベーマ」は苧麻にまつわる悲哀の歌である。民謡の大意は、仲筋村のヌベーマが御用布の原料となる良質の苧麻（白身苧）の種子と赤糸を新城島から貰い受ける代わりに、同島の新垣与人の賄女として嫁がせ、涙の別れを謡い込んでいる。新城島は苧麻の最適地で、「白身苧」は品質が良く、これで織った御用布は色艶が良く、評判が高かつたといわれる。

島の人々は人頭税時代には西表島に渡り、米を栽培し、王府に納めるとともに貢納布も負担していたが、村々の石高等を記した『御当国御高並諸上納里積記』（以後、里積記）によると、村位は布上位、石下々位となっている。一八八七年（明治二〇）の上布出来高をみると、上布三一疋、中布四反、下布一四反、赤縞細上布四三反、紺縞細上布四七反、白細上布三二反、白木綿布九七反、紺地木綿布三〇反、芭蕉布二五〇反などとなつており、離島では最も多量である。（喜舎場家文書『八重山藏元諸書類写』）



地機でミンサーを織る女性（竹富島）昭和45年

西、竹富東、竹富仲筋の養蚕実行組合が表彰されている。品評会は戦争が激しくなる一九四三年（昭和一八）まで行われた。交織布であるグンボウ（絹糸木綿、緯糸苧麻）は白地紺の夏着としてほとんどの家で織られた。

戦後は一九四九年（昭和二十四）頃から織物品評会が催され、芭蕉布、木綿布、絹布、赤縞布等が出品され、好評を博している。その後竹富東（前濱重雄）、竹富西（野原安雄）、竹富仲筋（勢頭敏晴）に苧麻生産組合が発足、県の補助金を受けて栽培増殖が図られた。しかし、苧麻は年々、増反されたが、価格が不安定という販路の悩みを抱えていた。上布は戦後の混沌とした時期には盛んに織られたが、島民の生活が安定すると、織る人も少なく絶滅寸前にあつた。

しかし、昭和三〇年代末頃から島を訪れる観光客が増え、ミンサーや上布を土産に持ち帰るようになると、島民は民芸品の価値に目覚め一九六二年（昭和三七）、竹富民芸組合を発足させ、織りの復活に努めた。風前の灯だったミンサーは、一九六三年（同三八）六月にミンサー講習会が修了し、これまでいた技術保持者に十一人が新たに加わり、合計二十人で再建が図られた。一九六四年（同三九）には日本民芸協会の一行が島を訪れ、芭蕉布、ミンサーなど暮らしに溶け込む織りに感嘆し、関係者を激励した。これが島の織物の再興に弾みをかけた。一九六五年（同四〇）にはミンサー並び上布講習会があり、段階的に織り手が増え、将来への展望が開けた。

現在、上布、芭蕉布、交織布（グンボウ）、ミンサー、麻布、そ

れに絹布などが織られている。かつて花織りのティサージ、広帯もあったが、今では中断している。近年、交織布の一種、絹芭蕉布も織られている。織り糸については、木綿は人頭税時代は島で供給していたが、一八八七年（明治二〇）年頃、本土から安価な糸が入ったので地元産は姿を消した。現在では本土からの輸入を使用している。苧麻糸、芭蕉糸は島産の手紡ぎを使っているが、近年、ラミー（機械紡ぎの苧麻）を本土から取り寄せ、素材に用いる上布が増えている。糸作りには紡ぎ手不足の問題があり後継者育成が迫られている。染め材料にはフクギ、インド藍、アカメガシワ、クール（紅露）、シャリバイなどの植物染料が用いられる。

◇上布

八重山上布は、植物繊維の苧麻を素材にして、白紺に織り上げたところに特徴を見出せる。今では苧麻にクールで捺染した茶紺に代表される。苧麻は人頭税時代には王府の指導に基づき栽培されたが、同税が廃止された後は各屋敷に植えて繊維を取り、上布に仕立てられた。上布は、かつて日常生活で接することが少なく現在でも祭祀儀礼における奉納芸能の衣裳として使われる。今では夏向きの上着に用いられることが多い。島には上布で縫つたズボンもある。

赤縞上布に代表される織りだが、植物染料を用いての経紺、緯紺、経緯紺もあり、図柄は実に多彩である。ミダイジマ、ウシ・ヤマ、バンジョウ、ピーギヤ・ヌ・ミーマガリ、コツタラー

トウイグワードの模様がある。ヒジリ紺はバランスのとれた美しい柄で、島独自のものとして長く受け継がれている。現在、一三舛、一四舛の上布が織られている。

◇芭蕉布

糸芭蕉の繊維で織つた布のこと。去る大戦前まで沖縄の各地で織られ、夏衣として愛用、かつては庶民の一般的な着衣だった。島の、平織りのこの布の特徴は地色に白の経紺のシユハナ、白とクール染めカラシンであること。いずれも島独特の明るさと、清潔感のある美しい布である。「種子取祭」などの祭りでは男性はシユハナ、女性はカラシンの経紺の同布をまとい参加する。また、祭りの時の神司の朝衣としても利用されている。昭和四〇年代に有田シズが指導者として後進に織りの技法を伝授した。

◇交織布（ゲンボー）

種類の違う繊維を交差させた平織りで、経糸に木綿、緯糸に苧麻あるいは芭蕉糸を素材に織り上げる。模様は縞柄、格子柄、経紺など実に多様性に富んでいる。また、白生地の織物もある。良質の木綿と苧麻は着心地がよく、大正期から庶民の日常着として愛用されてきた。近年、経糸に紡績綿糸、緯糸にラミー紡績糸を使用するようになっている。また、経糸に絹、緯糸に芭蕉を用いた絹芭蕉布が登場し、浸透しつつある。さらに、祭り衣裳として経糸に芭蕉、緯糸に苧麻の繊維で織つた布もある。昭和四〇年代に東玉盛ヌヒラを指導者に普及した。

◇ミンサー

ミンサーとは木綿を素材にした平織りの細い帯のこと。綿狭織（めんさおり）が語源でないか、とする説もあるが定かでない。

竹富島のほか、小浜島、与那国島、さらに那覇、首里、読谷、石川にも木綿による細帯がある。呼び名は、ほとんどミンサーだが

石川はメンサー、与那国ではカカンヌブーといい、それぞれ柄模様に特徴がある。



高機で織られるミンサー（竹富島）

ミンサーは手締めの藍染めの絹紡で、経糸が帶の表面を覆い、緯糸を隠している。いつ頃から織られたか不明だが、木綿が一八一〇年（嘉慶十五）に島に伝わることから、それ以降かも知れない。織り方は白い部分を残して染める括り染めの技法を探る。模様は帶の外側を縁取るように白と藍の繰り返し模様があるが、ここでムカデアシを連想させる。中央部には正方形の四つ組と五つ組の模様が交互に並ぶ。紺モチーフの五つ、四つ

の組合せは「いつの世までも」、そしてムカデアシを「足しげくおいで下さい」と読まれ、帯を恋人に贈る習慣としたことは、後世の人たちの創作であろう。何故、五つ、四つの組み合わせなのか、はつきりしないが与那国の方カンヌブーは模様が異なる。

昭和三〇年代後半に亀井カソツを指導者として普及した。今では藍染めだけではなく、クール、フクギなど植物染料を用いたものもあり、さらに五つ、四つの四方形模様をあしらった暖簾、テーブルセンター等も出回っている。

◇麻布、絹布

苧麻を素材に織られた荒く、ざつくりした風合いは軽くて涼しい。暖簾や座布団の布地に最適で使用される。上布に比べ、糸は太く粗目である。絹布の素材となる蚕最は、かつて養蚕が盛んな頃は糸取りされたが途絶えた。しかし、一九七八年（昭和五三）竹富養蚕組合が発足して復活、桑園が設置された。蚕室では繭の生産が行われた。一九八四年（同五九）には七・七トンを生産、本土の紡績会社へ出荷された。

だが、生産はそう長くは続かなかつた。キロ当り単価が下落し、採算が合わなくなつた。そして、一九九五年（平成七）には途切れた。当時、繭の生産しながら繭糸も取られたが現在、織りに使つている糸はその時に紡いだものである。手引きの糸で織られて絹織りは味わい深い。

◇その他の織物

島には、その他、紋織りの一種である花織りがある。それは縫い糸を入れた手さーじ、広帯に使われた。手さーじには女の心情が表れ、さらにオナリ神の靈力があるといわれる。織りは大山菊が長年取り組んできた。また、紅花の紅とインド藍で染めた素朴の花染め手さーじもある。

小浜島

八重山群島のほぼ中央に位置し、NHKの朝の連続ドラマ「ちゅらさん」の舞台になった島で知られる。島の真ん中、大岳の麓に小浜（北、南）集落、西端に細崎の小集落がある。島の代表的な民謡「小浜節」は、住み心地よい島の豊かさを讃える。「果報の島」といわれる島では稲作ができ、五穀の栽培が盛んだった。人頭税時代の『里積記』によると村位は石高、布とも上位となっている。一八八七年（明治二〇）の反布出来高をみると、上布一五疋、中布三反、下布五反、赤島細上布二一反、紺島細上布二三反、白細上布一七反、白木綿布八三反、紺地木綿布五〇反、芭蕉七三反などとなつており、竹富島より負担量が少ない。

養蚕の奨励は、竹富島と同様行われている。昭和初期には北第一、北第二、南第一、南第二の養蚕実行組合があり、その後、解散となり新たに北、南の組合が設立されている。戦後になると、いち早く婦人会主催の織物品評会が催され、インド藍を染料に用いた織物が出品された。また、苧麻を持ち寄つての布織り競争も試みられている。



産業共進会に出品された伝統的な織物（小浜島）

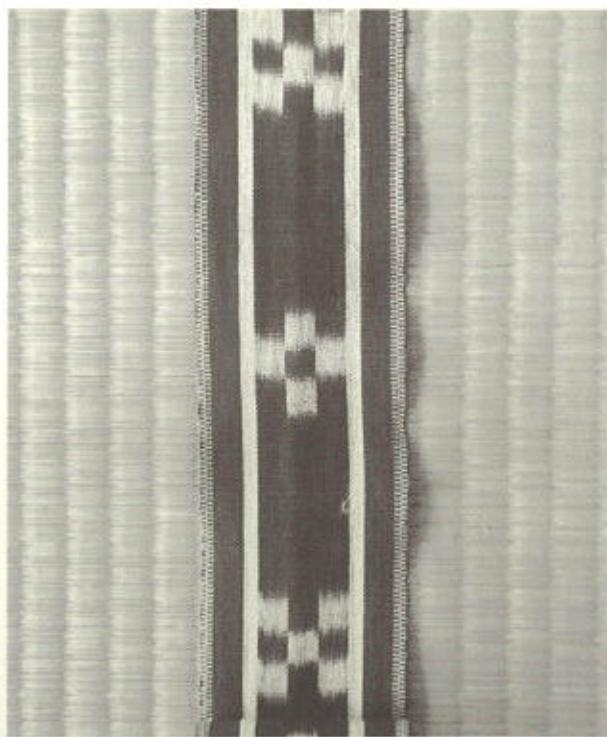
当時、島内産の木綿、絹糸、苧麻、芭蕉を素材にインド藍の植物染料を主体にした織物が織られた。一九五三年（昭和二八）には八重山地方庁主催の第一回葛蘭製糸講習会が開講され、一〇人の女性が技術を修得した。また、苧麻栽培の増殖にも力が入れられ、小浜農事実行組合に補助金が交付された。島の産業振興及び活性化を目指す産業共進会は古くから催されており、產品を一堂に集めて盛況である。同会には織物も展示され、織り文化の持続に一役買っている。織りの伝統は人頭税の時代から途絶えることなく、今でも連綿と続いている。

島は「インド藍の里」と呼んでもいいくらい、植栽したインド藍で織物が仕立ててられている。昔から「小浜の女性は機織りができなかつたら女として認められない」という風潮があつた。島は伝統工芸の地であるが、島の織りが今に残っているのは祭祀と大いに関係がある。「豊年祭」が近づくと女性たちは機織りに向かい、織りに取り組む。祭りには島で染織された着物を着用する習慣が往古より続いている。「豊年祭」に加えて「結願祭」もうだが、男性は母、妻、姉妹が丹精込めて織つたインド藍の紺地苧麻、紺地芭蕉布の着物をまとい、祭礼に参加する。着物柄に特徴が見られ、若い世代は大きな縞模様、そして年輩者になるほど細かい縞柄、古老は紺無地の着物と模様が異なる。女性は芭蕉布の紺、花織りなどである。

苧麻布、芭蕉布はかつて手紡ぎ糸を使って織られたが、今では紡ぎ手不足でラミー紡績糸がほとんど使用されている。ミンサー、花織手さーじがあつた。また養蚕が盛んだった頃は、白生地の絹

布も織られた。竹富島と同じ柄模様のミンサーは、インド藍染めの格別な美しさを誇り、素晴らしい色彩を放つている。植物染料はインド藍だけでなく、フクギ、ヤマモモ、マンゴロープも使われ、各種織物に用いられた。

織物の指導者だった大嵩ミツ、黒島アツ、嵩原マツル、大久ヤ



島で織られたミンサー（小浜島）

ス、登野貞、宇保ヨシ、小浜モウシ、大嵩ナミ、成底トヨラは島の染織を先導し、その功績は見逃せない。今では竹富町の織物後継者育成事業の導入により、若い女性の織り手も増え、婦人会主催の織物展示会では伝統に根差し、現代性を感じさせる織物が出品される。

その他の島々

西表島、黒島、波照間島、鳩間島、新城島は人頭税時代から、織りの伝統が残っていたが、今では途絶えた。しかし、西表島西部では十数年前から地元の素材を生かし、伝統文化を礎にした新しい織りが生まれており、東部では移民集落ながら上布、芭蕉布等に取り組む意欲的な人々が織り技法の研鑽に励んでいる。波照間島では少數の女性により、染織が行われているようである。黒島、鳩間島、新城島では昔ながらの織りを再興する動きは見られない。

◇西表島

西表島は島の東部、西部、北部に一部平地があるが、ほとんど亜熱帯常緑樹に覆われている。集落は河川が注ぐ平地及び、その付近に形成され、琉球王府時代からの古集落と戦後、計画移民や自由移民によつて創建された新興集落からなる。加えて廃村になつた集落もある。その跡地には人頭税時代の名残を止める糸芭蕉や植物染料が見られ、往時の面影を微かに知ることができる。

島の西部は祖納、干立の両村が古集落であり、「里積記」に王府時代の村位を記す。それによると、村位は石高、布とも上位になつてゐる。一八八七年（明治二〇）の反布出来高によれば、西表村（祖納、干立）は上布一七疋、中布二反、下布八反、赤縞細上布一二反、紺縞細上布七反、白細上布七反、白木綿布三七反、紺地木綿布八反、芭蕉布一一五反の貢納布を負担している。人頭税時代その他、崎山、上原の両村の負担量もあるが、この村はその後、

廃村になつた。

人頭税が廃止され、貢納布の負担が解かれると、祖納、干立ては自家用あるいは換金用に苧麻糸、芭蕉糸等を使用して反布が織られた。各家々では屋敷内の一角に苧麻が植えられ、さらに糸芭蕉が畑地に栽培され、糸紡ぎが行われた。藍の畑も確保されて藍染めのほか、自生する紅露（クール）、ヒルギなどを使用しての草木染めがあり、織りが行われた。織機は地機が用いられたようだ。養蚕も行われた。一九三二年（昭和七）の記録によると、春蚕第二期帰立は五〇枚で、六五戸の農家が蚕業に従事している。当時、西部では炭坑が盛んであり、炭坑を中心とした一種の都市社会が形成されていて、気軽に織布を購入できた。これが、織りを衰退させた一因でもあるようだ。

戦後のムラ社会は、混沌として段階的に復興したが、戦前の織りを復活することが出来ず、次第に衰微して姿を消した。だが、復帰後に至り、自然豊かな島に自生する植物染料を染め材料に用いて、苧麻糸、芭蕉糸、絹糸を使用しての個性に満ちた織物を手掛け人々が生まれている。

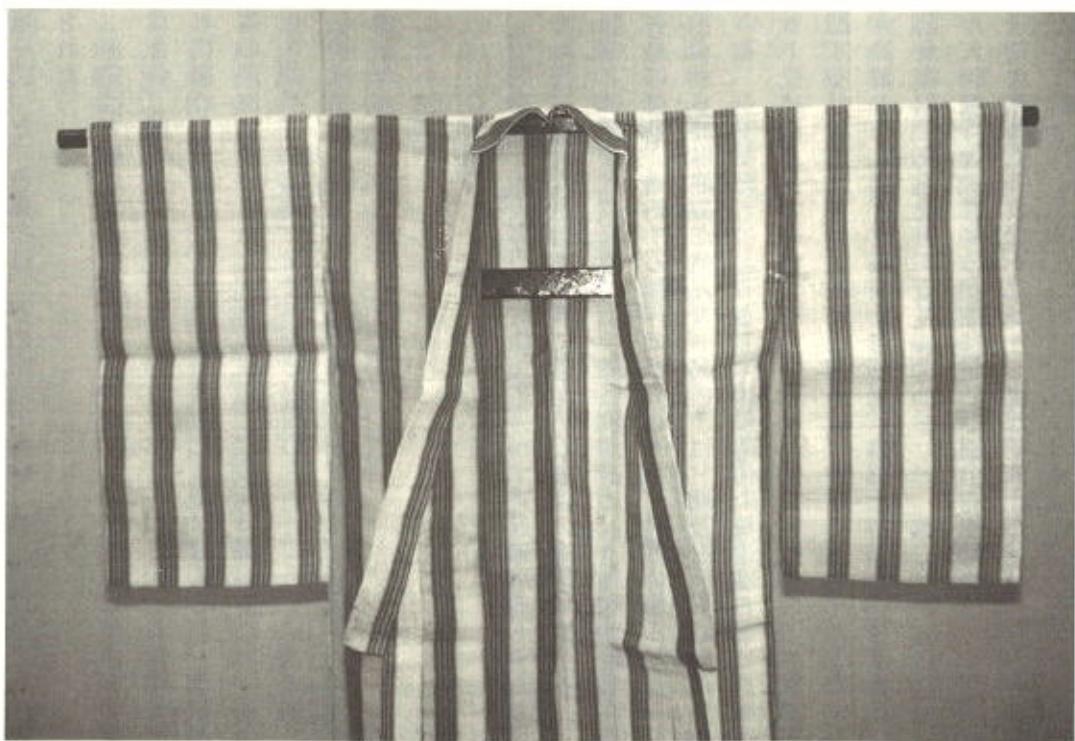
古見村は島の東部の古集落であり、一八八七年（明治二〇）の年貢布にかかる反布出来高によると、上布五疋、中布一反、下布一反、赤島細上布三反、紺島細上布七反、白木綿布一二反、紺地木綿布五反、芭蕉布二〇反の貢納布を負担している。人頭税時代に古見のほか、南風見、仲間、高那の三村もあつたが、後に廃村になつた。古見は人頭税の廃止後も苧麻、糸芭蕉を素材に糸紡ぎして織物を仕立てた。桑園を設けて養蚕も行われた。糸染めには

植物染料の唐藍、フクギ、ヒルギなどを使い、経縞、紺模様の織物を仕上げた。これは戦前まであった。しかし、戦後には途絶えた。終戦後しばらくして、新興集落として大富、豊原が計画移民によつて誕生した。移住者のなかに織りの技術を持つ人もいた。戦後間もなくして大富苧麻生産組合が結成され、栽培増殖に乗り出した。

◎黑島

黒島は島全体が隆起珊瑚礁からなる平坦な島である。集落は保里、仲本、宮里、東筋、伊古の五つだが、大正初期には保慶村もあつた。「黒島口説」は島を代表する民謡として知られる。今では畜産一筋の島として名を馳せるが、昭和三〇年代初期まで畜産とともにサトウキビ、タマネギが栽培され、養蚕による繭の生産もあり、島の経済を潤した。苧麻布、芭蕉布もあつた。島の関係者の中には粗目の上布を持つている人もおり、かつて島に織物の文化があつたことを窺わせる。

人頭税時代の『里積記』によると、村位は石高が下位、貢布は上位となつてゐる。一八八七年（明治二〇）の年貢布に関する反布出来高では上布二〇疋、中布四反、下布六反、赤縞細上布二六反、紺縞細上布二四反、白細上布二〇反、白木綿布六八反、紺地木綿布二五反、芭蕉布二〇五反などとなつており、竹富島に次ぐ負担量である。しかし、人頭税が廃止されると、自家用の織りだけとなり、次第に衰微していった。ただ養蚕は県が奨励したこともあり伸張した。昭和初期には東筋東、東筋西、仲本、宮里、保



島で織られた上布（黒島）

里に養蚕実行組合が組織され、原蚕飼育場に決定されることもあつた。養蚕は戦後も続々盛んで、集落の周辺には桑園が設けられ家屋の一部を蚕室に充て、繭を生産した。しかし、採算が合わないことと、販路の問題、産業構造の変化などもあり、衰退し昭和三〇年代後期には見られなくなつた。今では織りに従事する人の姿は見られない。

◇波照間島

波照間島は日本最南端の有人島で、隆起珊瑚礁からなる。集落は島の中央に北、南、前、名石、離れて西方に富嘉の合計五つの部落がある。今ではサトウキビの島だが、昭和三〇年代中頃まで稲作が行われ、戦前から戦後しばらくの間、機織りがあつた。『里積記』によると、村位は石高が下々位、貢布上位とある。一八八七年（明治二〇）の貢布に關係する反布出来高をみると、上布二〇疋中布四反、下布六反、赤島細上布二八反、紺島細上布二七反、白細上布二四反、白木綿布七一反、紺地木綿布一五反、芭蕉布六五反を負担する。

人頭税が廃止された後の織物の動きについては、新聞資料などの断片的な記録しかないが、島びとの証言から昭和三〇年代初め頃まで苧麻、芭蕉を素材にした織物があつたことが分かる。今でも村内に苧麻や糸芭蕉が植生している。島びとの中には絹縞、緯縞、格子柄の芭蕉布を大事にしている人がおり、かつて島に織りの文化があつたことを窺わせる。島では昭和二〇年代後半に苧麻生産組合が発足し、県の栽培増殖補助金の交付を受けて生産の増

量を図った。芭蕉布は、どの家庭でも織られ、普段着として着用された。

蚕業は、他の島と同様盛んだつた。昭和戦前には養蚕組合が結成され、繭の生産が行われて島外へ出荷された。これは昭和三〇年代初めまで行われた。屋敷の周囲には桑が植えられ、桑園が集落の周囲に設けられた。染め材料には植物染料が使われ、琉球藍やフクギ、ヤエヤマアオキなどが用いられた。今では島の織りの伝統は消えたが、最近、島に移り住んだ織りの経験をもつ女性が僅かながらやつてているようだ。

◇鳩間島

鳩間島は、西表島の北の海上に浮かぶ隆起珊瑚礁からなる小島である。集落はやや中央部に突出する中森の南麓に広がる。『鳩間節』は島を代表する民謡で知名度が高い。人頭税の時代から西表島に渡り、通耕する稲作の歴史があり、島間の繋がりは深い。古くから島は漁業が盛んで、島内では甘藷及び五穀が栽培されている。『里積記』によると、人頭税時代の村位は石高、貢納布とも上位にランクづけされる。一八八七年（明治二〇）の貢納布に関する反布出来高によれば上布五反、中布、下布それぞれ一反、赤島細上布六反、紺縞細上布五反、白細上布三反、白木綿布二反、芭蕉布四〇反を負担する。

人頭税時代には島の女性は精巧な細上布を織っていたが、税廃止になると織られなくなつた。ただ苧麻布、芭蕉布などが普段着として織られるだけだった。しかし、養蚕は盛んだつた。昭和初

期には養蚕組合が結成され、繭の生産が行われた。これは戦後も続き、昭和三〇年代初期まで見られた。だが、それ以降、過疎化等もあり、織りの伝統が消えた。

◇新城島

新城島は、上地島と下地島の二島からなる隆起珊瑚礁の平坦な島で、下地島は牧場が広がり廃村同然である。上地島は学校もなく、現在八人しか住んでいない。しかし、豊年祭の時には島を離れた郷友たちが生まれ故郷に帰つて、祭りを行い、郷友意識を確かめ合う。過疎化の荒波に流された島は、今では往時の姿を止めない。人頭税時代の『里積記』によると、村位は石高下位、貢布上位に位置づけられている。一八八七年（明治二〇）の年貢布に関する反布出来高をみると、上布七疋、中布一反、下布二反、赤島細上布六反、紺島細上布七反、白細上布四反、白木綿布一五反、紺地木綿布五反、芭蕉布八四反を納める。

島の養蚕は、明治三〇年代に始まり、大正初期から奨励強化が図られた。昭和初期には上地養蚕組合、下地養蚕組合が組織されて蚕業に弾みがついた。そして下地養蚕組合の共同蚕室の設置が認められ、繭の増産に拍車がかかつた。戦後、島は西表島の大原への移住問題などを抱えて混沌としていた。衣食住に変化が見られるなかで、織りの文化が顧みられなくなつた。貢納布に始まつた、かつての細上布が姿を消し、織りの伝統が忘れ去られた。今では極小人口のなかで、織りはまったく行われていない。

おわりに

島々の織りの文化は現在、伝統ある竹富島、小浜島、さらに近年、西表島で開花しているが、一九八九年（平成元）に竹富町織物事業協同組合が発足して絢爛になつた。織り関係者の技術研鑽等があり、上布、ミンサーが通産大臣指定の伝統的工芸品になった。組合が結成されてから上布、ミンサーの後継者育成事業が始ままり、若い織り手が誕生した。島々は独自性に満ちた風土がある。今後、庶民の生活文化に根差しながらも、産業的な要素も加味した織物の展開を図る必要があろう。

（通事孝作）

〔参考資料〕

『琉球新報』『先島新聞』『八重山新報』『八重山民報』『先島朝日新聞』『海南時報』『南西新報』『八重山タイムス』『八重山毎日新聞』

（以上、戦前）
（以上、戦後）

〔参考文献〕

- 『波照間島総合調査』（沖縄県立博物館）
- 『西表島総合調査』（沖縄県立博物館）
- 『沖縄の伝統染織』（富山弘基、大野力）
- 『八重山ミニサー』（竹富町織物事業協同組合）
- 『八重山上布』（石垣市織物事業協同組合）
- 『八重山生活誌』（宮城 文）
- 『沖縄民俗』10号（琉球大学民俗研究クラブ）

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等
から寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

| 受贈者御芳名 | 受贈図書名 | 前用 | 真鍋和子 |
|------------------|------------------------------------|-------|------|
| 全国ハンセン病療養所入所者協議会 | 宮古南静園『創立70周年記念誌』 | 加治工真市 | 安 |
| " | 星塚隨想集 | " | " |
| " | 復権への明 | " | " |
| 石垣市教育委員会 | 石垣市の文化財 | " | " |
| 竹富町議会 | 竹富町議会会議録(第1回、2回) | H14 | " |
| 宮良彦 | 八重山諸島の平家伝説と倭冠の行跡 | " | " |
| 石垣市長 | 石垣市立八重山博物館 紀要第19号 | " | " |
| 八重山博物館 | 八重山藏元絵師画稿集 | " | " |
| 財團法人海洋博覧会 | 首里城公園10周年記念企画展『琉球王朝の宰—美・技・芸』CD-ROM | " | " |
| 記念公園管理財団 | " | " | " |
| 沖縄大学地域研究所 | 『所報』第27号 | " | " |
| 金武町史編纂委員会 | 金武町史 第二巻 戦争本編 資料編証言編 | " | " |
| 城辺町教育委員会 | 人頭税廃止百周年 人頭税 | " | " |
| 竹富町教育委員会 | 人頭税廃止百周年 宮古藏元 | " | " |
| 竹富町古謡集 | (第4集) 2冊 | " | " |

沖縄県文化振興会公文書管理史料編集室

ジウム 第6回琉球・中国交渉史に関するシンポ

2002年八重山開拓係新聞目録(中)

ジュゴンはなぜ死ななければならなかつたのか。

西表方言集

一九八八年度 琉球の方言

一九八九年度

一九九〇年度

一九九一年度

一九九二年度

読谷村立歴史資料館

読谷村民話史料集14 大湾・古堅の民話

読谷村立歴史民俗資料館 年報第27号

読谷村立歴史民俗資料館 紀要第26号

17 16 15 14 13

業務日誌

契約締結。

九月二七日

・「町史だより第22号」原稿、(有)八島印刷に入稿。

九月三〇日

- ・安富俊雄氏（梅光学院大学教授）、西表の節祭に関する資料収集のため来室。
- ・渡谷鎮明氏（中部大学助教授）、黒島の抱護林、大原の集落地図収集のため来室。

一〇月一日

- ・「新聞集成V」昭和三五年原稿初校校正。

一〇月三日

- ・「新聞集成V」昭和三一年（同三四年原稿）二校、グローバル企画印刷（株）から送付。

九月一〇日

- ・町史だより第22号編集。

九月一七日

- ・人頭税廃止一〇〇年記念事業期成会役員会、室長出席。

九月一九日

- ・高橋品子氏（東大和高校教諭）、西表島のエコツーリズム関係の資料収集のため来室。友寄英正氏（琉球放送通信員）同席し過去のイリオモテヤマネコ問題についてレクチャ。

九月二〇日

- ・「新聞集成V」昭和三五年原稿初校、グローバル企画印刷（株）へ送付。
- ・「新聞集成V」昭和三一年原稿二校、着手。

一〇月一五日

- ・前田剛氏（国立公園協会）、西表島の文献目録収集のため来室。
- ・行政文書分類整理編纂業務着手。（南山舎）

一〇月一六日

- ・「町史だより第22号」の印刷製本について、(有)八島印刷と請負刷へ指示。

九月二十四日

- ・「町史だより第22号」三校（最終）校了、印刷製本を(有)八島印

一〇月一八日

- 「新聞集成V」昭和三三年原稿二校校了、グローバル企画印刷

(株)へ送付。

・「新聞集成V」昭和三一年～同三年の竹富町関係歴史年表の作成に着手。

一一月一二日

- ・八重山地域史協議会第一回研修会、網取村の史跡巡見実施。

一一月一五日

- ・人頭税関係史料の収集及び整理分析。
- ・上原裕氏（自然環境研究センター）、竹富ビジターセンター設計に向けて、資料収集のため来室。

一一月一九日

- ・八重山人頭税廃止百年記念展オーブンセレモニー（於・石垣市立八重山博物館）に銘里室長、通事参加。

一〇月二五日

- ・NHKエンタープライズ記者、由布島の写真資料収集及び取材のため来室。

一〇月二八日

- ・宮良安彦氏（県立芸術大学非常勤講師）、本人執筆の「八重山諸島の平家伝説と倭寇の行跡」小冊子寄贈のため来室。
- ・「竹富町史第22号」、(有)八島印刷より納本。

一〇月三〇日

- ・「町史だより第22号」、区長及び関係機関へ送付。
- ・八重山地域史協議会第一回研修会（網取村史跡巡見）の資料作成。

一一月二七日

- ・財自然環境研究センター、石川厚志、鈴木隆の両氏、竹富ビジターセンター建築設計に向けて資料収集のため来室。

一一月二九日

- ・「新聞集成V」巻頭のグラビア写真選択、編集。

一二月二日

- ・「新聞集成V」昭和三一年原稿三校校了、グローバル企画印刷(株)へ送付。

一一月八日

- ・八重山地域史協議会、網取村史跡巡見に向けて学習会。
- ・里井洋一編集委員から上原村に関する近世史料の提供。

一一月一日

- ・「新聞集成V」昭和三五年原稿二校校了、グローバル企画印刷(株)へ送付。

一二月三日

- ・八重山毎日文化賞奨励賞を受賞した通事孝作主事の受賞祝賀会を開催。
- ・八重山毎日文化賞奨励賞を受賞した通事孝作主事の受賞祝賀会を開催。

- ・「新聞集成V」昭和三四年原稿三校校了、グローバル企画印刷
株へ送付。
- ・第二卷竹富島編の収録項目を検討。
- 一二月五日
- ・大城敬人氏（名護市議会議員）、竹富町の寄留民名簿調査のため来室。
- 一二月六日
- ・「新聞集成V」昭和三三年原稿四校校了、グローバル企画印刷
株へ送付。
- 一二月九日
- ・内原節子氏（石垣市立図書館館長）、スラ所関係資料収集のため来室。
- 一二月一七日
- ・第十一卷資料編「新聞集成V」印刷製本契約、グローバル企画
印刷株と締結。
- 「町史だより第23号」編集に着手、項目を選定。
- 一二月一九日
- ・「新聞集成V」昭和三三年原稿四校校了、グローバル企画印刷
株へ送付。
- 一二月二四日
- ・「町史だより第23号」編集、「写真にみるわが町」の原稿執筆
- 一二月二四日
- ・「新聞集成V」昭和三一年、同三四年原稿四校作業継続。
- 一二月二四日
- ・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）、雑穀に関する資料収集のため来室。
- 第十卷資料編「近代1」編集、竹富島喜宝院蒐集館文書の史料
点検。
- 一二月一五日
- ・第十卷資料編「近代2」（必要書 必要書類集）、各課へ配布
- ・「新聞集成V」昭和三一年収録記事目次作成に着手。

一二月二五日

・「新聞集成V」総説執筆。

・高橋品子氏（都立東大和高校教諭）、エコツーリズム関係資料
収集のため来室。

・伊藤房雄氏（東北大学大学院助教授）、黒島の産業に関する資料
収集のため来室。

・高相徳志郎、永岡久美子（琉球大学）、西表環境問題研究に際
して協力依頼のため来室。

一二月二六日

・「新聞集成V」昭和三五年原稿三校校了。

一二月二七日

・町役場各課から行政文書の引き取り移管。

・宮良作氏（元県議会議員）、戦争マラリア資料収集のため来室。

◆二〇〇三年（平成一五年）

一月六日

・「新聞集成V」昭和三二年原稿四校作業継続。

一月八日

・「新聞集成V」昭和三一年、同三四年原稿四校作業継続。

一月一四日

・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）、雑穀に関する資料収集のため来室。

一月一五日

・「新聞集成V」昭和三一年収録記事目次作成に着手。

- ・伝統的建造物群保存地区制度とまちづくり講演（講師・江面嗣人文化庁文化財調査官）に銘里室長、出席。
 - ・前大用安氏（祖納出身）、「西表方言集」発刊し寄贈。
- 一月一六日
- ・「新聞集成V」昭和三一年収録記事目次作成完了。
 - ・「新聞集成V」昭和三一年、同三二年原稿四校校了。
- 一月一七日
- ・「新聞集成V」昭和三二年、同三三年収録記事目次作成。
 - ・「新聞集成V」昭和三四年四校校了。
- 一月二一日
- ・「新聞集成V」昭和三三年原稿四校校了、グローバル企画印刷株へ送付。
- 一月二二日
- ・「新聞集成V」昭和三三年収録記事目次作成。
- 一月二三日
- ・「新聞集成V」昭和三四年収録記事目次作成。
- 一月二四日
- ・「新聞集成V」昭和三一年、同三五年収録記事目次作成完了。
 - ・黄紹恒（台湾国立政治大学）、鍾淑敏（中央研究院台湾史研究所）、上江洲儀正（町史編集委員）とともに台湾関係資料所在確認のため来室。
- 一月二五日
- ・「新聞集成V」総説執筆継続。
- 一月二六日
- ・「新聞集成V」総説執筆継続。
- 一月二九日
- ・鳩間島史跡巡見資料作成。
- 一月二四日
- ・第十八回町史編集委員会資料作成。
- 一月二九日
- ・「新聞集成V」昭和三四年原稿四校校了。
- 一月三〇日
- ・「新聞集成V」昭和三五年原稿四校繼續。
 - ・「新聞集成V」昭和三四年収録記事目次作成完了。
- 二月一日
- ・第十八回町史編集委員会開催、任期満了に伴う委嘱状交付式及編集委員会。（十九委員中、十七委員出席）
 - ・第十卷資料編「近代2」出版祝賀会開催。
- 二月二日
- ・鳩間島史跡巡見、海上シケのため傭船航行できず中止。
- 二月三日
- ・「新聞集成V」編集後記執筆完了。
- 二月四日
- ・「新聞集成V」総説執筆継続。
- 二月五日
- ・「新聞集成V」総説執筆継続。
- 二月六日
- ・宮良作氏（元県議会議員）、黒島小、波照間小の沿革史収集のため来室。
 - ・「八重山毎日新聞」「八重山日報」原寸大製本契約、（南）沖縄マイクロセンターと契約。原本を同社へ送付。

編集後記

◆『竹富町史だより』第23号を発刊しました。本号は、町史編集委員の本田昭正氏から寄贈された「波照間島の歴史・伝説考（一）—仲本信幸遺稿—」を目玉に、論稿として「竹富町・島々の織物文化」を盛り込んで編集しました。それにシリーズの「写真に見るわが町」「記念碑を訪ねて」「文化財探訪」「聖地めぐり」も入れました。「波照間島の歴史・伝説考」に出てくる振石盛御嶽は、今回「文化財探訪」で取り上げた、ケシムリ御嶽のことです。

◆「波照間島の歴史・伝説考」は、仲本氏が生前に書き残した、様々な手稿を本田委員が編集、整理し題名を付したもので、波照間の昔を知る貴重な資料です。読み込むと、仲本氏の抜群の記憶力、博識には頭が下がる思いがいたします。今後、「これらの資料は「島々編」の基礎資料として反映させていきたいのです。町史編集室では今後も、さらに力を注いで島じまに埋もれる資料を発掘します。

（通事）



平成15年3月31日発行

竹富町史だより

第23号

編集発行 竹富町役場町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地大和ビル2F東

☎ 0980-82-9985